





A decorative border featuring stylized autumn leaves in shades of orange, red, and green, with a central star-like leaf pattern.

同生堂

漢王國主之德











# 上之巻目録

|        |    |           |     |
|--------|----|-----------|-----|
| 女子教訓の事 | 一丁 | 女道と守る事    | 一丁  |
| 平生奉勸の事 | 二丁 | 女子二從の事    | 二丁  |
| 貞節と才の事 | 二丁 | 婦人七老の事    | 三丁  |
| 洞南が妻の事 | 七丁 | 平生心願の事    | 八丁  |
| 美人の相の事 | 八丁 | 初より仕附の事   | 十丁  |
| 歩り風の事  | 九丁 | 女子つゝあはれの事 | 二十丁 |
| 立居の事   | 十丁 | 書家の事      | 廿二丁 |
| 女僕と主の事 | 十丁 | 和歌の事      | 廿二丁 |

田中がてし玉傳の女

|         |     |          |     |
|---------|-----|----------|-----|
| 女僕と主の事  | 十丁  | 系布の道は事   | 廿二丁 |
| 又字置揚の事  | 十九丁 | 纏物いぬの事   | 廿二丁 |
| 和歌置揚の事  | 十九丁 | 女心好む事    | 廿四丁 |
| 色紙置揚の事  | 二十丁 | 四季衣振の事   | 廿五丁 |
| 衣服置揚の事  | 廿二丁 | 化粧仕度等の事  | 三十丁 |
| 琴置揚の事   | 廿二丁 | 人小持振の事   | 卅二丁 |
| 尚置揚の事   | 廿二丁 | 家内の人とある事 | 卅二丁 |
| 三從の事    | 廿二丁 | 魚を食ふ事    | 卅三丁 |
| 髪のかねの事  | 廿二丁 | 骨のこえの事   | 卅四丁 |
| 眉とそけの事  | 卅二丁 | 吸わとひやうの事 | 卅五丁 |
| 齒と歯の事   | 卅二丁 | 飲めぬの事    | 卅五丁 |
| 化粧と下着の事 | 卅二丁 | 浴服赤服の事   | 卅七丁 |



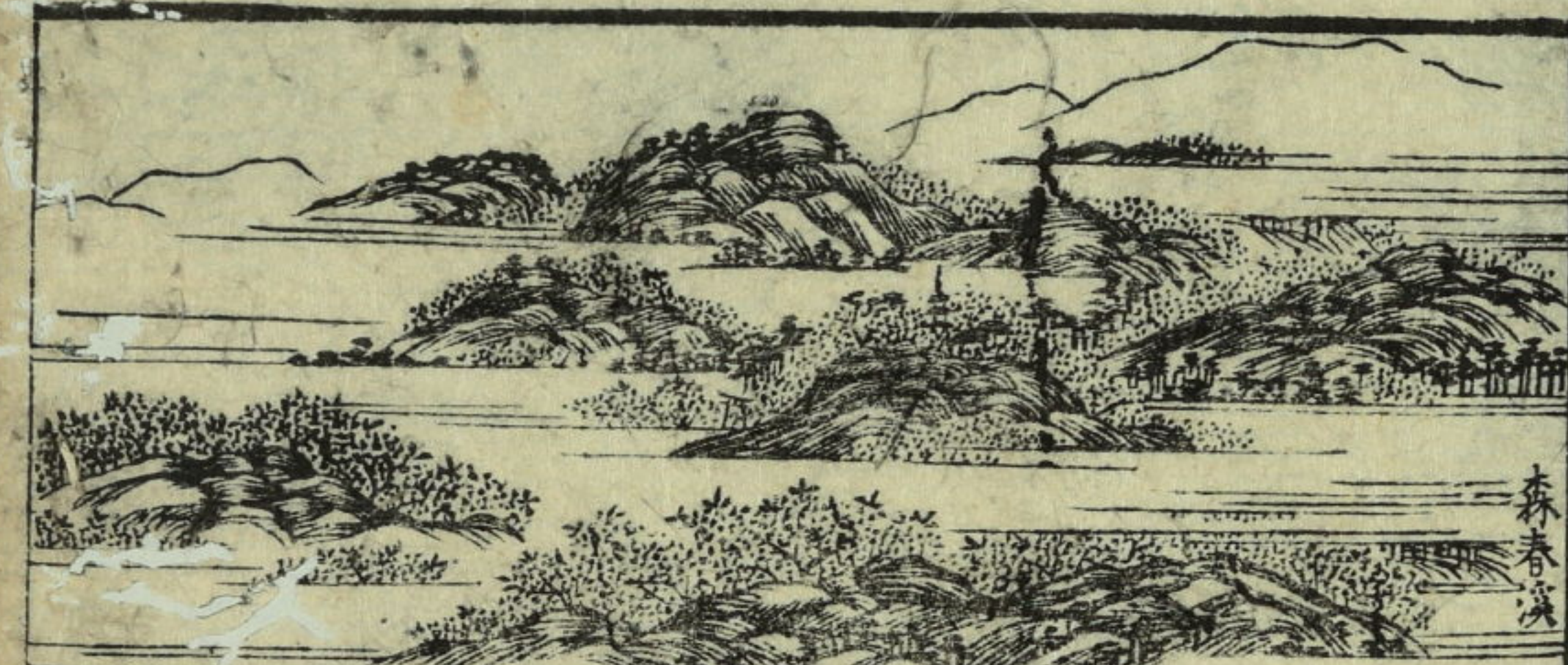
|          |    |          |    |
|----------|----|----------|----|
| おろろの姑の事  | 世三 | 菓子と出さる事  | 世三 |
| 紅粉姑の事    | 世三 | 糍と事なる事   | 世三 |
| 松井の事     | 世三 | 門くひ姑の事   | 世三 |
| 龍子湯煖湯ぬけ姑 | 世三 | 隠れ姑の事    | 世三 |
| 青土の事     | 世三 | 門くひやうの事  | 世三 |
| 昆布とまの事   | 世三 | 顔敷くひ姑の事  | 世三 |
| 仇成あふたの庵下 | 世三 | ぞうに喰ひたる事 | 世三 |
| 梨子柿の皮とる事 | 世三 | 五節句なる事   | 世三 |
| 降乃くひ姑の事  | 世三 | 響意の品む湯の事 | 世三 |
| 肥後喰うけ事   | 世三 | 上之巻目録終   | 世三 |

女諸上四

女諸禮儀綿卷之上

○女の道と守る事

夫女子の陰やて肉を流し男の陽やて血と云ふ  
 る天賦自然の乃に任かり陽を流しては衰後を疾  
 中て衰するのされ女は男より相のふくみて暗とて  
 人の性たどる照一のうらにて万端をさうりある  
 ねつあるはさる行あるを心せねばははれもあふ  
 一の重畳のたぬふふたふと来あるもの  
 乃といふはさるや知さぬは父母に孝とて  
 男姑より之を夫と云ふ一貞操と云ふは  
 上と教ひ下と傳へて傳へて来あることと女は道  
 と云ふは性育の今をわけて貞女賢女と云ふ人



森春溪



○女初より老よりいられ  
 中へ人海をすむればこそ  
 ちがてめをいひ送らる事  
 うれしき時父母の者  
 けしき成るまでいづれ  
 夫もあやうと姑あや  
 留はあやうと姑あや  
 係と係はて他のあや  
 係とあやうと姑あや  
 けしき成るまでいづれ  
 夫もあやうと姑あや  
 留はあやうと姑あや  
 係と係はて他のあや  
 係とあやうと姑あや

ちがてめをいひ送らる事  
 うれしき時父母の者  
 けしき成るまでいづれ  
 夫もあやうと姑あや  
 留はあやうと姑あや  
 係と係はて他のあや  
 係とあやうと姑あや  
 けしき成るまでいづれ  
 夫もあやうと姑あや  
 留はあやうと姑あや  
 係と係はて他のあや  
 係とあやうと姑あや

のこみいーぞく鑑ひまの  
 らふ合ふる事あやうと  
 姑のふ合ふる事あやうと  
 けしき成るまでいづれ  
 夫もあやうと姑あや  
 留はあやうと姑あや  
 係と係はて他のあや  
 係とあやうと姑あや





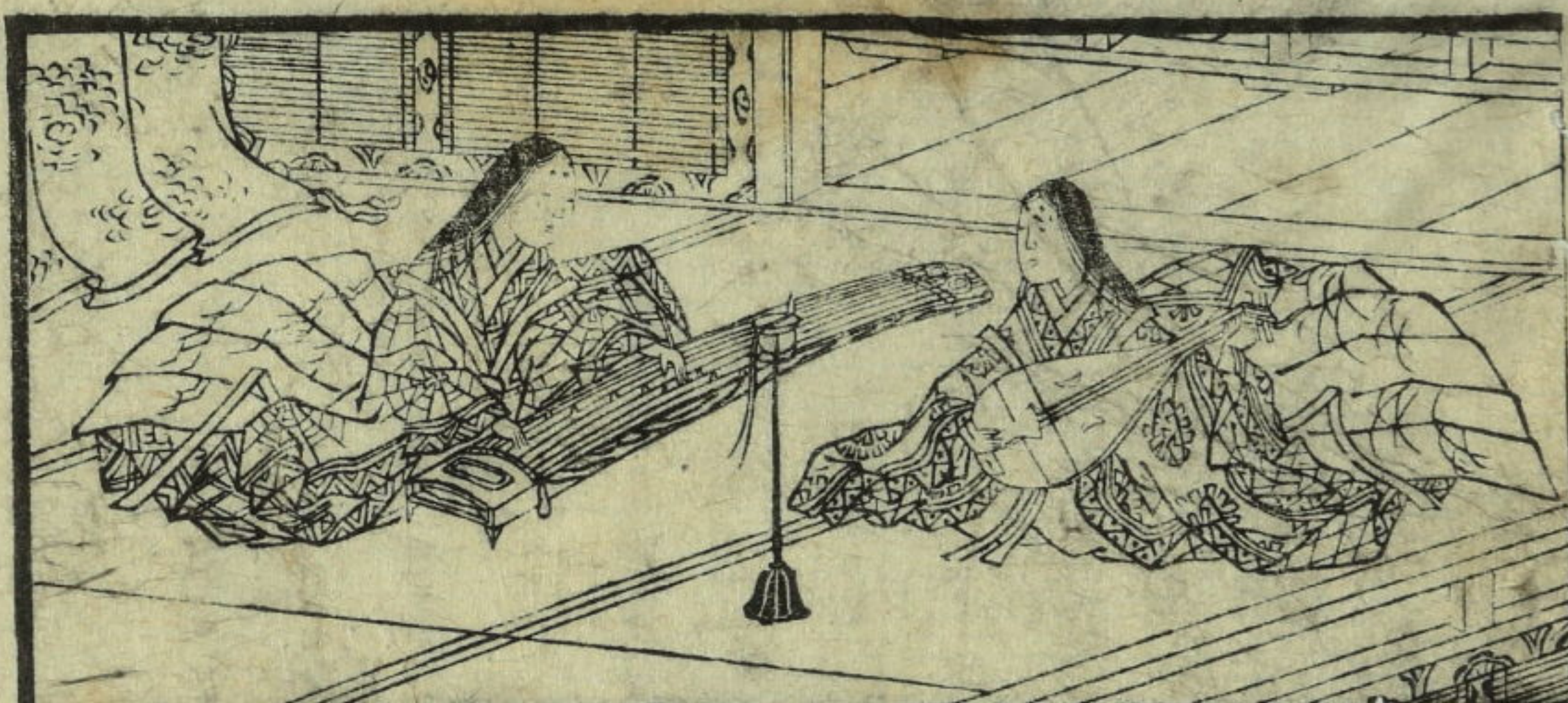
日毎ひごとよんようろう一いち因ゆかり其その父ちち伯女はくにょとて終すまふ事こと時ときて身み病やまい  
なむを始はじめは皆みな父母ふぼのあはれの時とき親おやをもおゆる忍しのぶふそ  
ちて女の他ほかなき方かたとぞまべり板いたむろし尚さらう父母ふぼもしく  
甚こころらうえ有ありたきつみある

女子三坂の事

夫女お甘れて六事も候も三の苦あり二つ小雅と云々  
親は後方より此と云ふほど是と雖もこれ不考  
のと云ふ所二つ五年盛てい丈夫及び万端あるも此  
世に候はれぬ身と云ふなりほまをぬれり子に候へ  
候はれぬ道路は神とひろげ魔と途の例おこしに此三  
候とくくぬくむれ候るゆゑとして我をにらめり云々  
のども親にまよふものあり申して他にお社路より



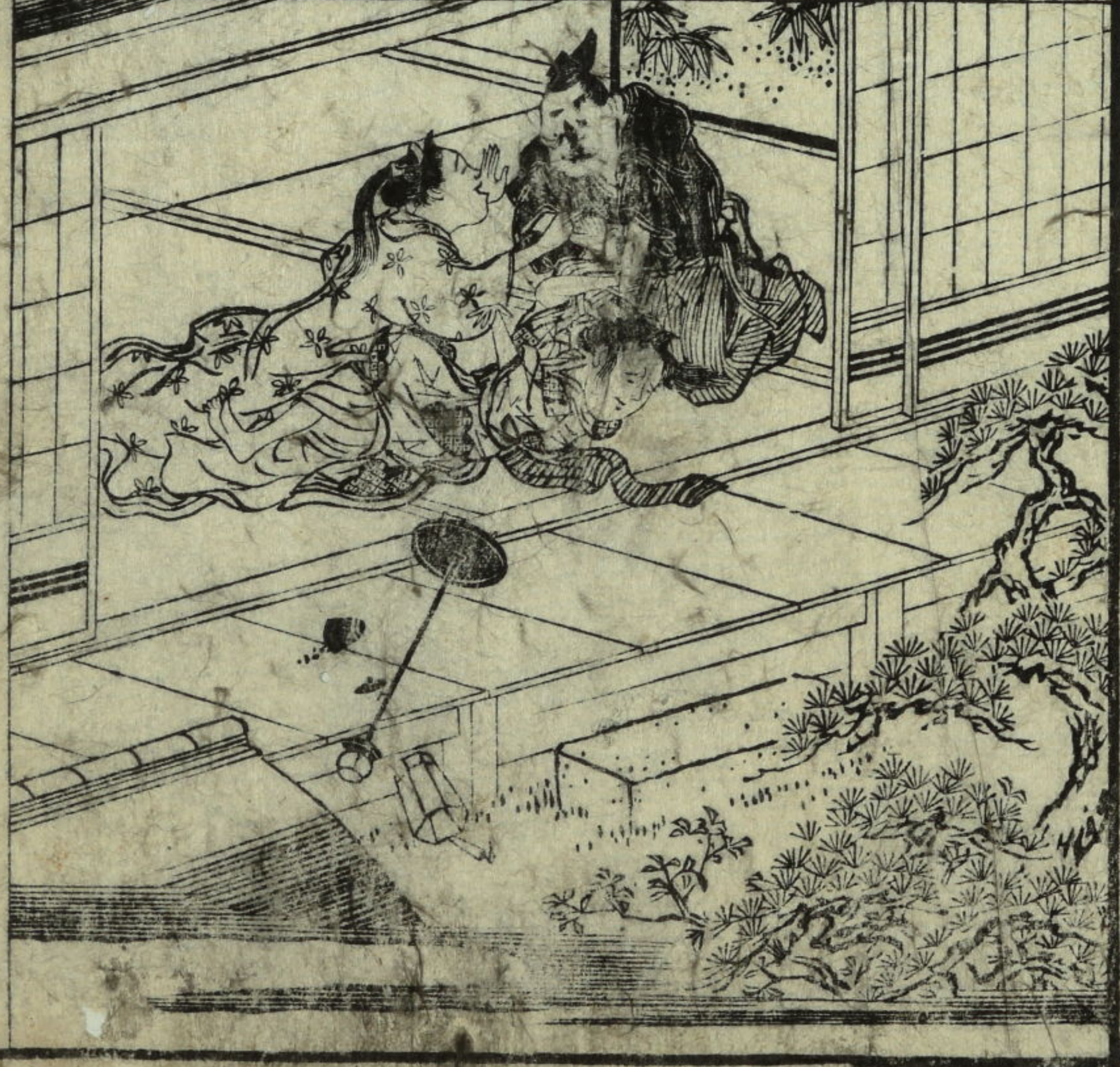




○婦人七老の事

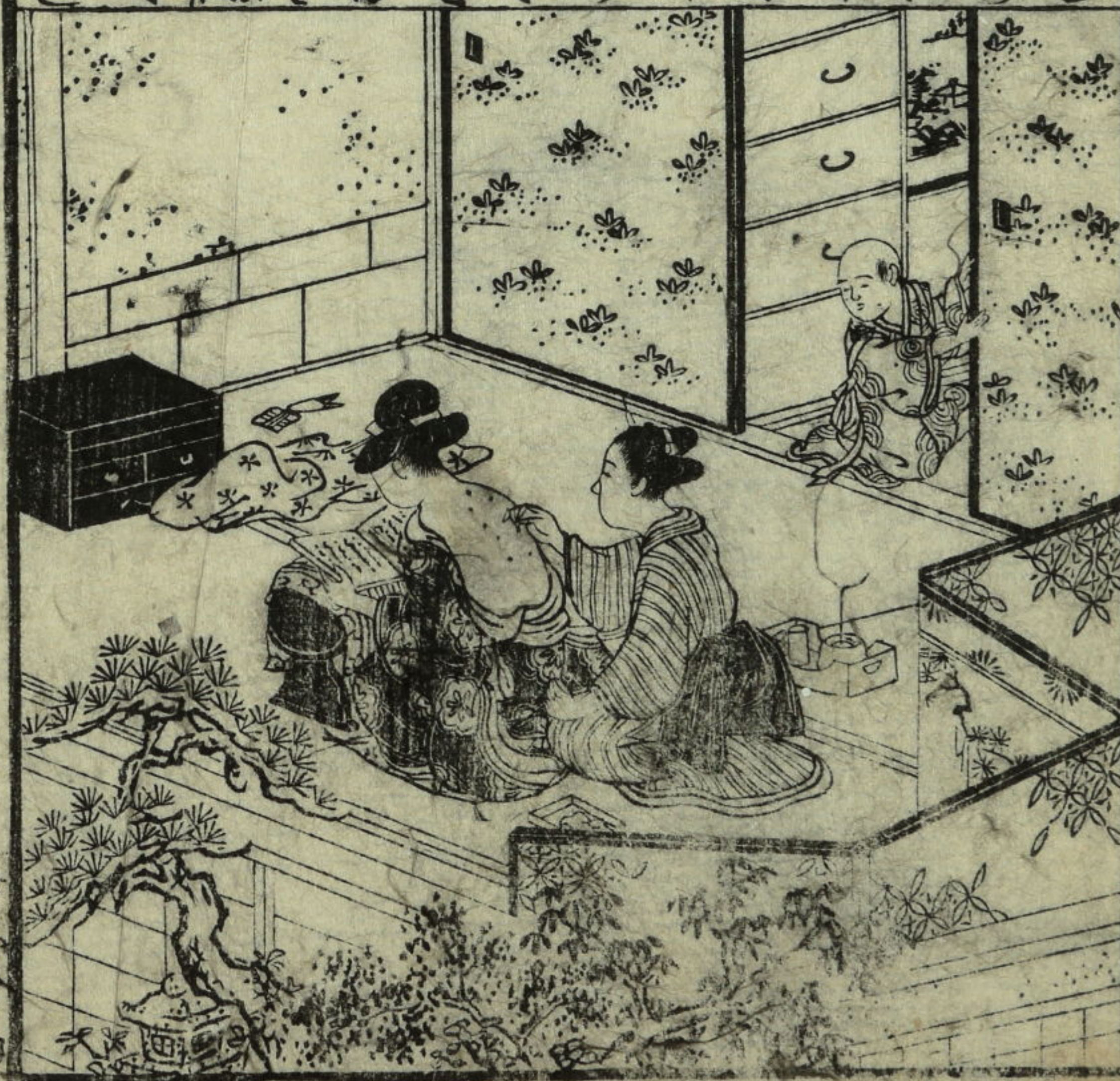
和人の女も女子の男子と有りて是より次子有り  
 第一男ははなれなきとて嫁とて切ふ段に孝  
 とて一期の位仕と有りておめえなる事あり  
 和人の女も女子の男子と有りて是より次子有り  
 第一男ははなれなきとて嫁とて切ふ段に孝  
 とて一期の位仕と有りておめえなる事あり

又なほの男おゐいさすうれ  
たつらんをかこせがゐのぞと  
とねむつれくいのれず  
にまも止むとゆきなり  
あけだれなるおれもな  
るうのふはけ者なる  
ふもひわくもつ莫  
りゆ若仇のどや  
○女貞女を身とる  
上つれんぬを疎と  
く書琴琵琶ともほふ  
へくまの琴琵琶の  
あふどもふ流の  
く大考のやて貞女を





守り女の秘おろしうゝぬと  
 一と一と一と一と一と一と  
 女ありきうてまきうれ  
 富くう父おろしぬと  
 再びあへせんぬと  
 せのれど又さうけい  
 やすい女子あるぬと  
 天乃とつとを宴とけ  
 中しとるさ夫とぬと  
 今又嫁のりぬと  
 今又嫁のりぬと

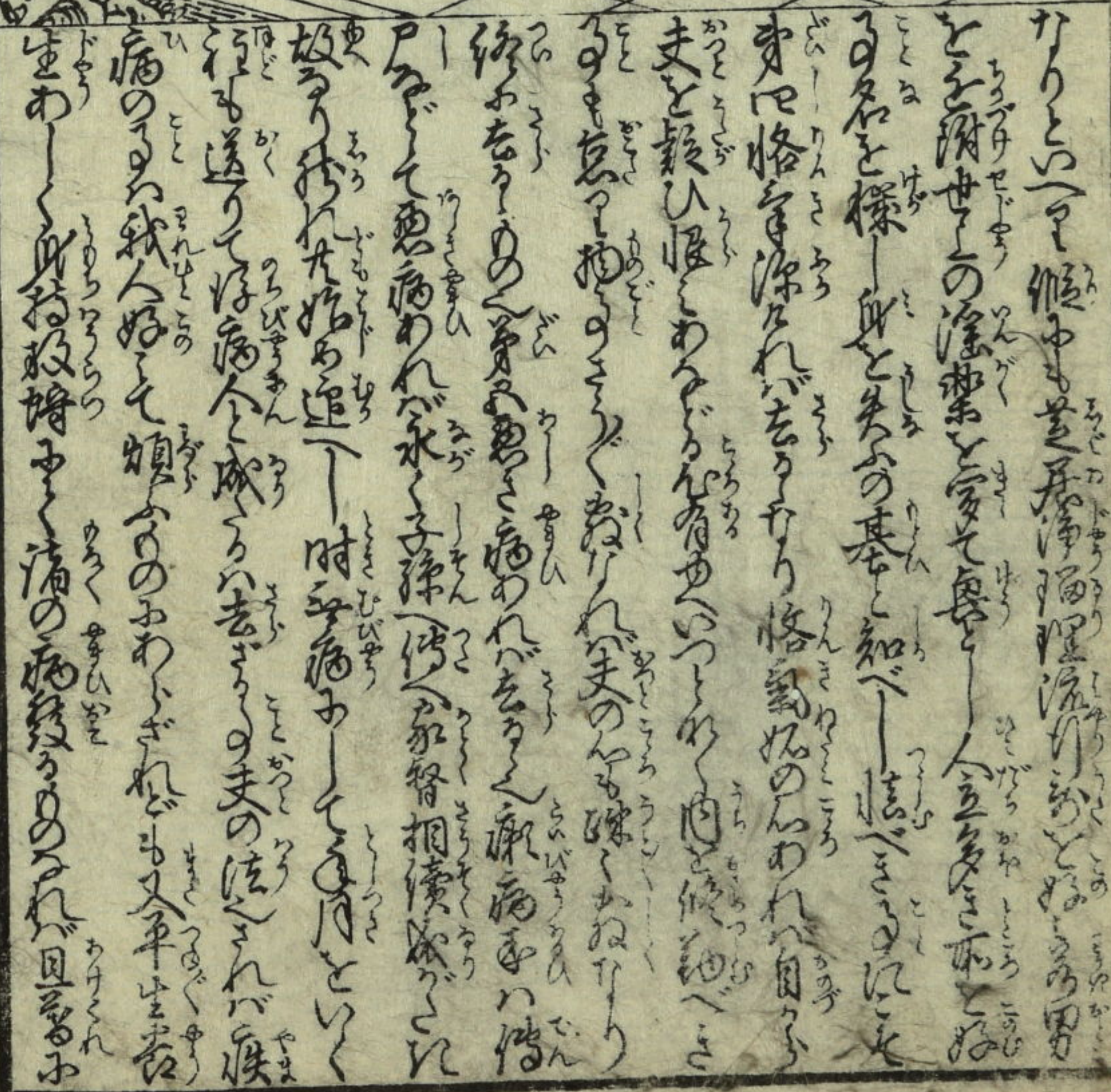


女流上ノ四



守り女の秘おろしうゝぬと  
 一と一と一と一と一と一と  
 女ありきうてまきうれ  
 富くう父おろしぬと  
 再びあへせんぬと  
 せのれど又さうけい  
 やすい女子あるぬと  
 天乃とつとを宴とけ  
 中しとるさ夫とぬと  
 今又嫁のりぬと  
 今又嫁のりぬと







せと使のまふりしすべし  
 とのよ父母のまふりしすべし  
 雄のつとめを教へ雄の意  
 ねわふ赤糸と申し  
 つてそ教へたりとてその  
 意をかの雄の意とて  
 榮のまふりしすべし  
 おろしお花むらふを年  
 おろしに付し糸えのや  
 有しお父母のまふりし  
 り娘と嫁せし人との  
 意とてお父母の意とて  
 一生たふく御やくとて  
 世を渡りしとて人々意

[illegible]



といふものなほおのどけし  
 ふうふとちねの長とやへる  
 えが  
 人間として二人のまゐるもの  
 うらやまぬものかといふべし  
 ○ひうへん元の世は潤  
 甫といふ人あり年五十ふ  
 かりとみまうりおれば  
 書のかま人妻と入ると  
 入るといふもいふといふもの  
 といふべし  
 うふ婦と心癒とれたのそ  
 王氏の娘とゆへ妻や  
 といふものごとくおしなれど  
 此うけも又本書とぬひ



女流上ノ七

[illegible]







A black and white woodblock print illustration of a woman in traditional Japanese court attire sitting at a low table outdoors. She is looking down at an open book. On the table are a vase with a flowering branch, a small bowl, and a small jar. A large, stylized rock formation is to her right, and a large tree with broad leaves is in the background. A fence is visible in the foreground. The artist's signature '森春溪' (Mori Harukawa) is on the right.





いづれに就て申すに遠きより大發するの嘆ひも付いた  
ぞ金體のほひ勝れも自體落るるを名ひをいふなり  
るまゝのほひ冬も夏も自りく仲のあそびも  
成るくねいひとつくたさるふとそ悲しく思ひあは  
りたり枯風は立あそものといふに枯風をいふなり  
成落よものと知べし鼻の先のと報りて身清く  
るまゝに其ういふに身清く成たむじをいふせん  
かたむくは其お清く思ふに其まののおとそ其  
上り成落れと知ひ万のふと用べし其の男女  
清く其のふと知ふに其まのふと其まのふと  
の別ちなり其のふと其のふと其のふと其のふと  
孝れなり其のふと其のふと其のふと其のふと

所も<sup>ところ</sup>か<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>ほ<sup>ほ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>  
 う<sup>う</sup>とい<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>  
 人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>  
 も<sup>も</sup>の<sup>もの</sup>なり

○女おんなれーと軍つうに書うハ  
女おんな書しよ比ひ賣う艦かん女にょ大だい夢む  
大だい和わ小せう學がく服ふく名な列れつ女にょ傳でん和わ  
俗ふく意い子し列れついいかかとと義ぎ并へい首しゆ  
百ひゃく首しゆかかぞぞとと一いちははははり  
ととぬぬぐぐののののちちぬぬぐぐととぬぬぐぐ  
かかたたづづへへるる事こと中ちゆうととああつつ心こころと  
ととちちひひてて撰せんむむとと

○女<sup>め</sup>は<sup>は</sup>じ<sup>は</sup>じ<sup>は</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>  
 抱<sup>か</sup>き<sup>か</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>母<sup>はは</sup>が<sup>が</sup>好<sup>この</sup>む<sup>む</sup>













三のちやうど座の句とて  
 六のちやうど座の句とて  
 一のちやうど座の句とて  
 二のちやうど座の句とて

たのちやうど座の句とて  
 五のちやうど座の句とて

一のちやうど座の句とて  
 二のちやうど座の句とて  
 三のちやうど座の句とて  
 四のちやうど座の句とて  
 五のちやうど座の句とて  
 六のちやうど座の句とて  
 七のちやうど座の句とて  
 八のちやうど座の句とて  
 九のちやうど座の句とて  
 十のちやうど座の句とて

一のちやうど座の句とて  
 二のちやうど座の句とて  
 三のちやうど座の句とて  
 四のちやうど座の句とて  
 五のちやうど座の句とて  
 六のちやうど座の句とて  
 七のちやうど座の句とて  
 八のちやうど座の句とて  
 九のちやうど座の句とて  
 十のちやうど座の句とて

○女子物の半

一のちやうど座の句とて  
 二のちやうど座の句とて  
 三のちやうど座の句とて  
 四のちやうど座の句とて  
 五のちやうど座の句とて  
 六のちやうど座の句とて  
 七のちやうど座の句とて  
 八のちやうど座の句とて  
 九のちやうど座の句とて  
 十のちやうど座の句とて

一のちやうど座の句とて  
 二のちやうど座の句とて  
 三のちやうど座の句とて  
 四のちやうど座の句とて  
 五のちやうど座の句とて  
 六のちやうど座の句とて  
 七のちやうど座の句とて  
 八のちやうど座の句とて  
 九のちやうど座の句とて  
 十のちやうど座の句とて



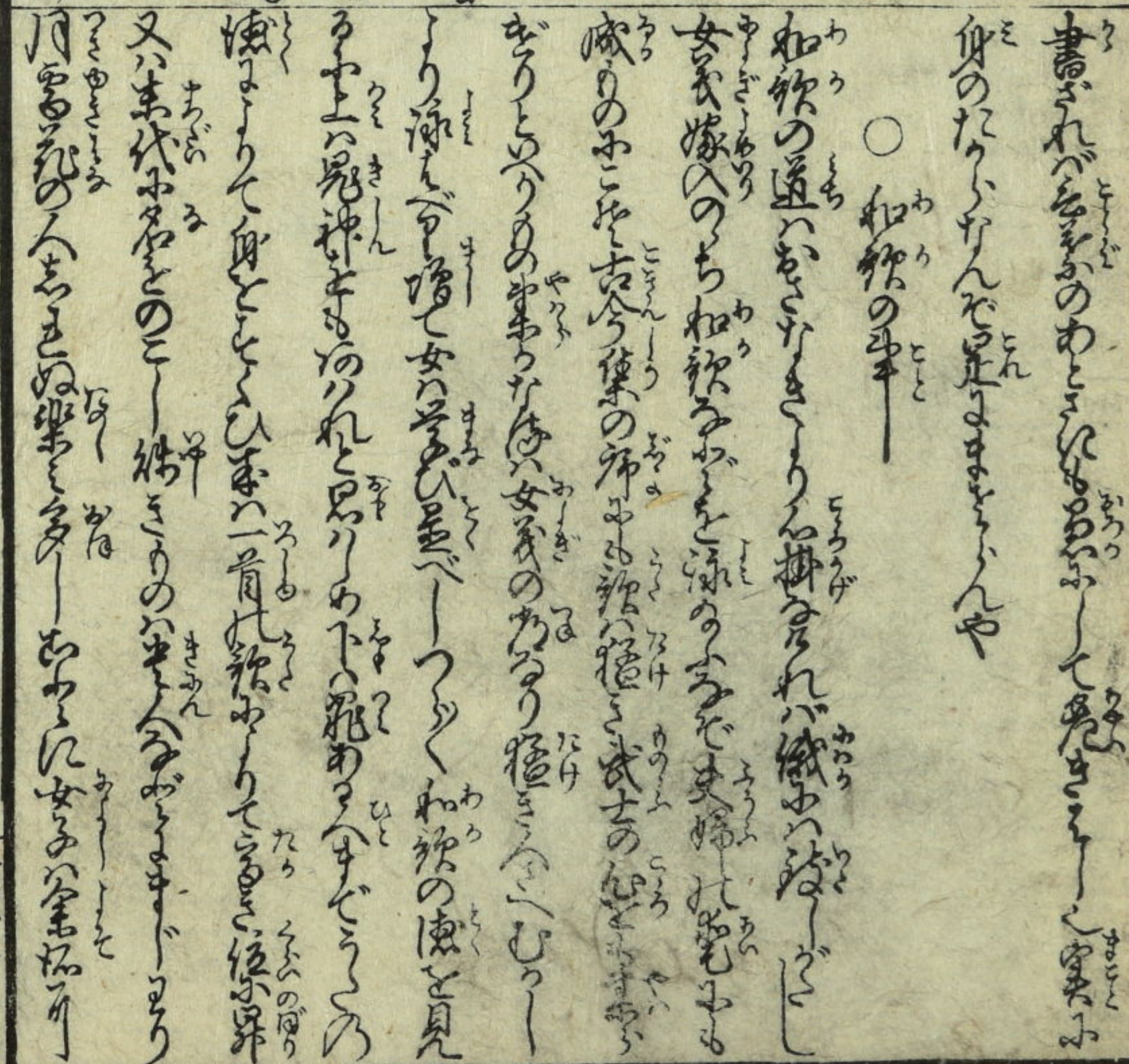


A black and white woodblock print illustration depicting four women in a traditional Japanese interior. The scene is set on a tatami floor. In the upper left, a woman in a light-colored kimono with a dark patterned obi is kneeling and holding a fan. To her right, another woman in a striped kimono and dark obi is kneeling at a low table, working on something. In the lower left, a third woman in a patterned kimono is kneeling and stirring a large bowl with a long-handled spoon. In the lower right, a fourth woman in a patterned kimono is kneeling and working on a box. Various objects are scattered on the floor, including a large pot, a small table with a plant, and several boxes. The background shows a sliding door (shoji) with a view of a garden.

ひと知れと云ふぬ女流の見方と云ふていふつゝあらう  
 と云ふぬまゝのぬき紙とあるのやそれう除くは  
 ぬき紙  
 ○書字の中  
 初よりわすれぬ簡要とせざる一先書をいふれ  
 べき書の用は西東もあらずどのの本字紙など  
 ひろひいても商人の世ふ向うがく痛害と云ふいた  
 中にもりつゝのふと運くありたゞと云ふていふ  
 わとる書ぬ人たつうやと能く吏師のせしむ  
 うかりわめせうたひ容態うくくともいふに  
 かりれぬわとる一先年と婦人とのとく書ぬ  
 ねばうにわとる見むう一思ふていふてう一と云ふ



A black and white woodblock print illustration of three women in a Japanese room. One woman is seated on the floor, looking up. Another woman is seated, looking down at a small object. A third woman is seated, looking down at a small object. There is a small table with a teapot and a tray. A large window is in the background.



















まゝ見たりとくどえ来髪はきとて中と一應と奥  
 なきとて又顔青とて中と刺むとたはのけ  
 てそりて隙の見ゆる其見えとく拙し生れきて  
 ちりきまのしれぬれども又人々意に宣いたいな  
 け利目かまぬ様よと一化粧も又第一中て  
 顔ふちの金髪洗つる其様一能ぬいりて  
 隙見たりとくどえ来髪はきとて中と一應と奥  
 なきとて又顔青とて中と刺むとたはのけ  
 てそりて隙の見ゆる其見えとく拙し生れきて  
 ちりきまのしれぬれども又人々意に宣いたいな  
 け利目かまぬ様よと一化粧も又第一中て  
 顔ふちの金髪洗つる其様一能ぬいりて

皇后の御しに此のありは  
 見たり  
 ○歯と洗つるの日本を  
 帝の御しに此のありは  
 子れ齒と洗つるの日本を  
 院の御しに此のありは  
 水と洗つるの日本を  
 ○化粧の日本を  
 化粧の日本を

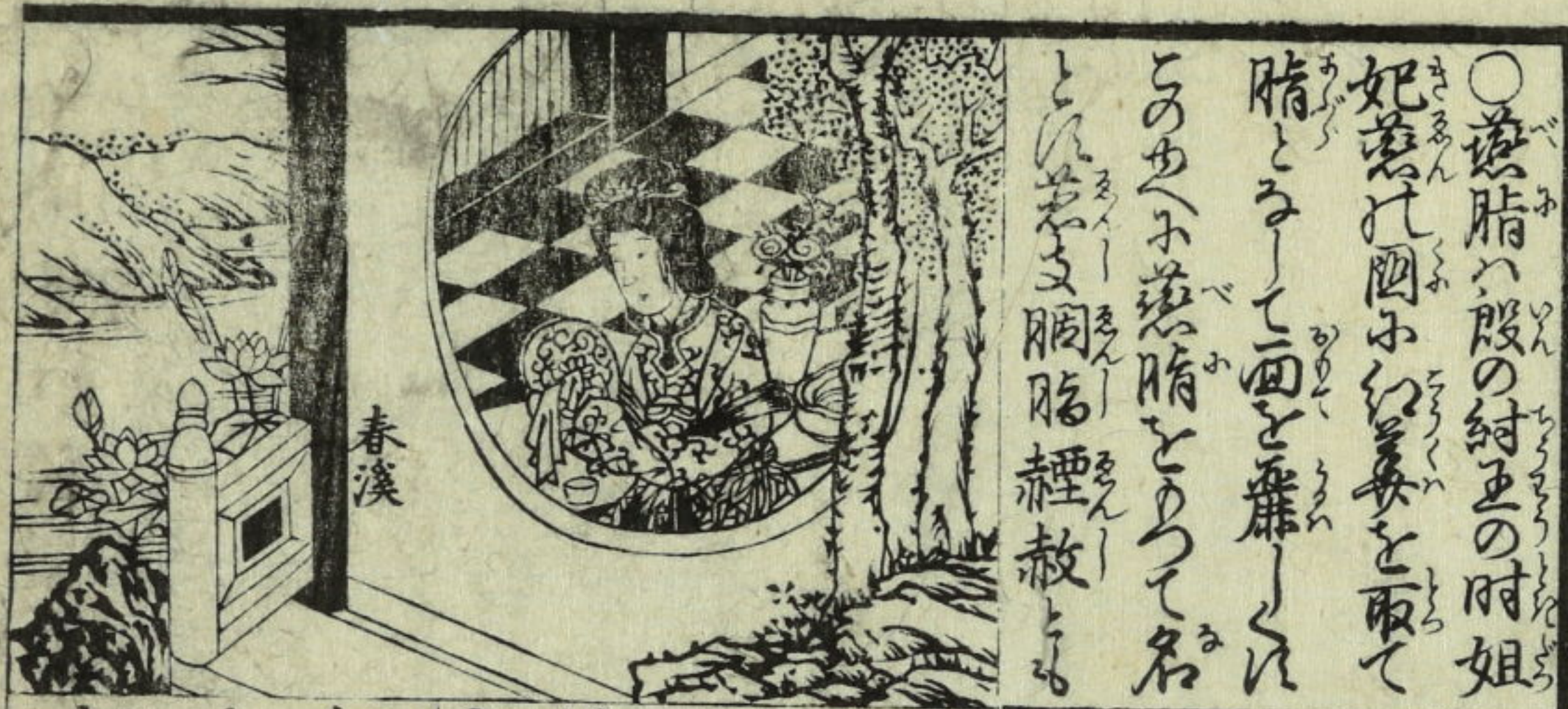
ひく清のてくどえ来髪はきとて中と一應と奥  
 なきとて又顔青とて中と刺むとたはのけ  
 てそりて隙の見ゆる其見えとく拙し生れきて  
 ちりきまのしれぬれども又人々意に宣いたいな  
 け利目かまぬ様よと一化粧も又第一中て  
 顔ふちの金髪洗つる其様一能ぬいりて  
 隙見たりとくどえ来髪はきとて中と一應と奥  
 なきとて又顔青とて中と刺むとたはのけ  
 てそりて隙の見ゆる其見えとく拙し生れきて  
 ちりきまのしれぬれども又人々意に宣いたいな  
 け利目かまぬ様よと一化粧も又第一中て  
 顔ふちの金髪洗つる其様一能ぬいりて



ともより男子の化粧を  
 前漢の時籍傳因儒子始  
 するより日本を男子  
 の化粧するは羽後のは  
 うふと一より一より  
 ○松粉は度々般の討主  
 とおしく粉お製姐妃これ  
 用ひく勝とほやらん日本  
 せい持統天皇はあはつ  
 親戚つりたりとひと  
 元来いふるふふあふに  
 秋多のもれかり組か  
 ろといふ女は河より河  
 つすもれるぞう



通とべうぶよくあらわれ  
 くみりあはれはる簡  
 ○家内の人をばり  
 人毎は其ののほまねの  
 みものかれ人かき  
 らばまゝ小見かてはつ  
 べー只其のどのに優  
 ことけうのなれを  
 のいばかあのらま  
 のなり又あまのま  
 せとへーまゝとあ  
 あはれへうとせれ  
 女侍上ノ卅三



○蕨脂は股の縛まの時姐  
 妃蕨れ圓ふ紅を  
 脂とて面を舞  
 ろあふ蕨脂とて名  
 とん若又胭脂紅  
 わへ情とけ男女は限  
 けおははー老子は  
 ぐとーのあり  
 ながあ育るの  
 縮かれ損といふ  
 ともやうに尾  
 程く加減とて  
 條の髪とて  
 思ひ情じー  
 名れ高れた  
 けつては  
 人ふとのま  
 女侍上ノ卅三



書りね給ふ事柄と  
 つも紅紙のまじ日本  
 中へ作らるゝや時代  
 未だ知らず  
 ○横竿のり紀原みく  
 赫唇氏梳とつらとつり  
 梳へるのときど一枕の  
 今の髪結ぐりから喬  
 る純お伊井冊のまの  
 御幣湯津の机梳に  
 女をなれ日本をも神  
 代りあるとんりぬ女  
 婿のひとあ作とあて并と  
 かり髪とにぬくとる



○魚の事  
 魚の指やうい男れどやうかしらとさげ様を  
 とほこなりそんたりともたのふの指  
 さらうらうらとつとたのふにさう

書のとふふむく細と  
 るつて是とつらよこに  
 つぬく舞臺あふあふ  
 祇園とて一あふあふ  
 ざーのとあふあふ女  
 に陽に男子も并し  
 一と難組とて  
 見えり  
 ○上ささるきハハハハ  
 わげてあふハハハハ  
 魚いとハハハハハハ  
 の時ハハハハハハハ  
 ○ハハハハハハハハハハ  
 ハハハハハハハハハハ



かくのござーあうやと女あかふ其人は白  
 て能ある指やうとてよー男あるとて  
 居たふ女あるとて白ひてとて  
 居てよー魚とてよー先たりのふあうつれ  
 てたのふに魚とてよー魚とてよー  
 ハハハハハハハハハハ







○湯やぐぬれぬをぬぐ  
あつゝまのふくむく  
湯よりて細く水を  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく



何れ吸ふのおぼろげさ  
箸とり膝の上より  
ひくさるゝを梳き  
おのゝにそそぐ  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく

うけざるやうにふくむ  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく



先を盛と指づれば其  
おのゝにそそぐ  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく  
あつゝまのふくむく



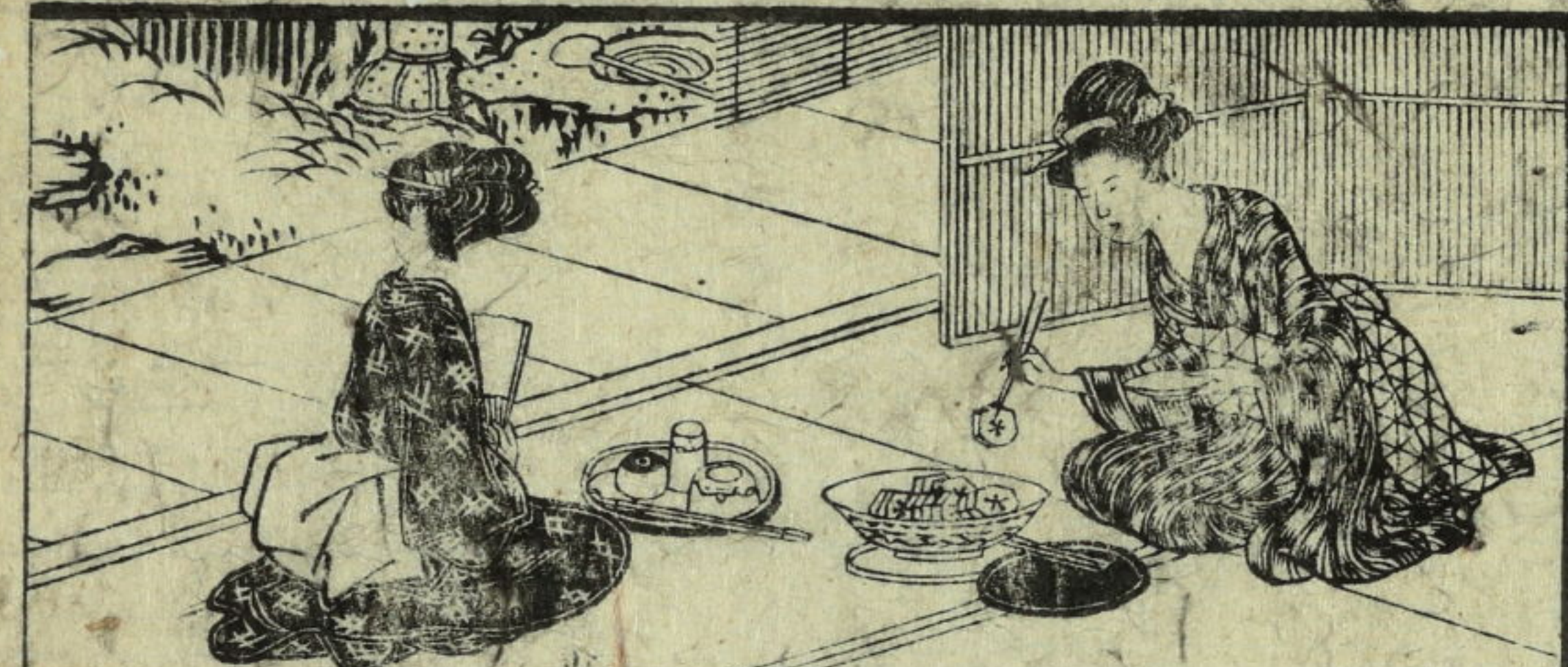




べー二款同小でたる先  
 実をくひ後けを吸べー  
 三款へみすどめあまじ  
 〇人は此布とまやまの  
 切目のことむけて二切ま  
 とほきり  
 〇凡とまのうとろいねの  
 男のきつてく皮をむき  
 二つよりて又糖まきうてま  
 いとまへー個一盛りのと  
 けの刻とて丸をうて切て  
 まきうてまきうてまきうて  
 〇凡とまのうとろいねの  
 男のきつてく皮をむき  
 二つよりて又糖まきうてま  
 いとまへー個一盛りのと  
 けの刻とて丸をうて切て  
 まきうてまきうてまきうて



出いらるる玉の半人のおへるきつてく皮をむき  
 〇菓子と出に事  
 本式ハ造りたるかき  
 さうなる菓子  
 又三方足らふて  
 かり平生ハ菓子  
 〇糖まのうとろいねの  
 糖とおさんとねのうとろいねの糖をまきうてま  
 外の盆にう巻目をほいけのうとろいねの菓子と



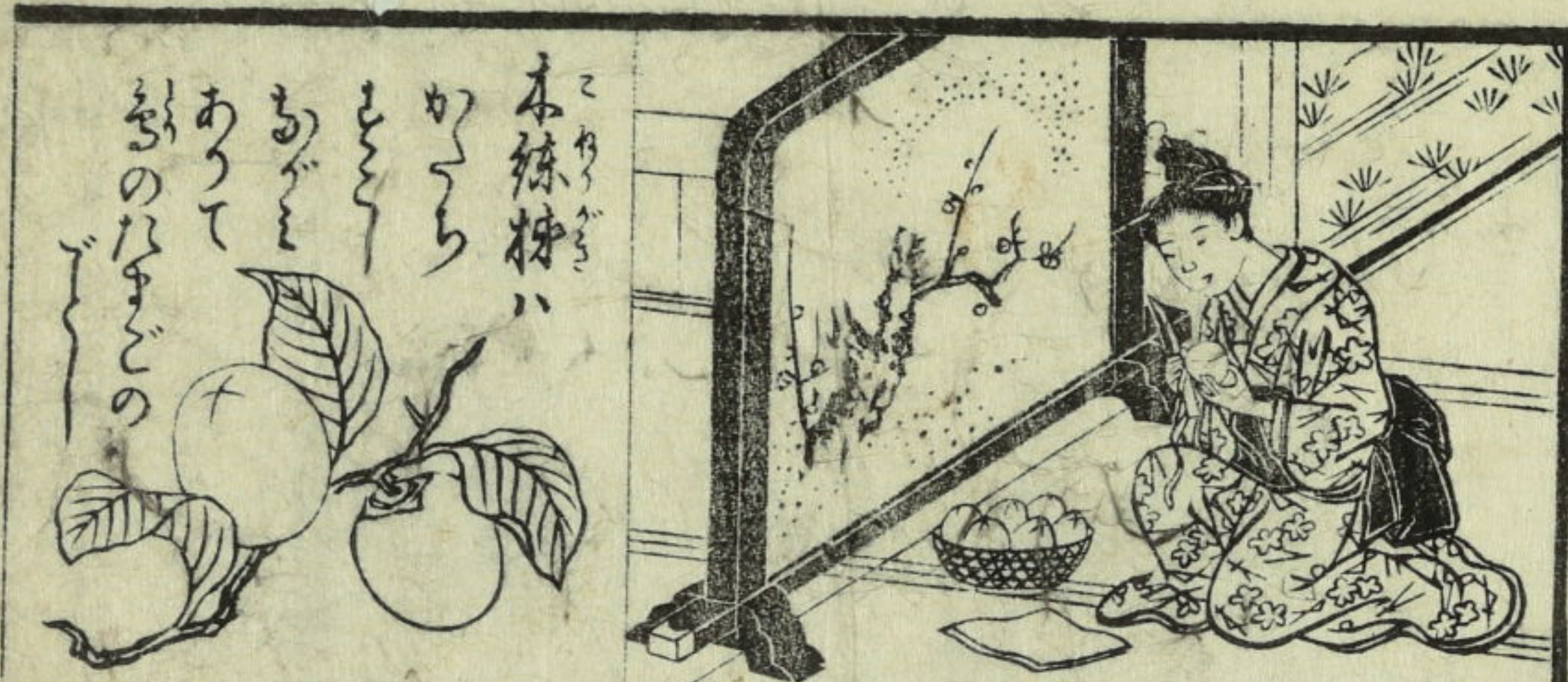
〇同食のうとろいねの  
 糖とおさんとねのうとろいねの糖をまきうてま  
 外の盆にう巻目をほいけのうとろいねの菓子と  
 〇糖まのうとろいねの  
 糖とおさんとねのうとろいねの糖をまきうてま  
 外の盆にう巻目をほいけのうとろいねの菓子と

〇糖まのうとろいねの事



却て入るまんじうとまゐる  
 とらへ紙とまゐて二つあ  
 まり中とまのや、焼瓶  
 ふろふくこて二つをひき  
 まゐせまゐりてなて焼  
 又もふんじとまのふせ  
 納り方二つの其の中をまゐ  
  
 きんぐふくくのてい—  
 れとまんじうとまのふ  
 ががごふてもかき—  
 ○同喰やうの事  
 陰頭とらへは箸あても  
 楊枝やとも右あそとり

女  
上  
九



それを持たず、腰刀と右のひげと、とりて、足付の  
方とより、ちあ、刻ふ、とりて、金に、中へ、入、ち、へ、せ、の  
す、た、の、ひ、に、お、か、さ、う、漆、の、上、小、お、さ、め、た、の、ひ、を、て  
とり、たる、腰刀、と、とりて、喰、べ、ー、又、く、喰、ん、と、か、ん、だ  
始、め、ふ、り、う、こ、は、其、中、う、ふ、ま、さ、て、す、こ、余、の、腰刀、と  
とりて、ひ、金、の、お、や、こ、お、刻、く、喰、た、き、こ、こ、れ、お、ん  
ち、う、と、う、お、金、の、お、と、も、彫、の、と、お、め、お、う、は、お、ん  
腰刀、を、金、に、く、お、さ、う、揚、枝、い、と、お、び、と、腰刀、と、右  
ち、う、と、り、お、げ、お、い、ち、う、と、お、め、た、の、お、う、そ、一、は、お、つ、  
お、ひ、し、と、取、て、ま、つ、る、ー、兎、角、中、の、お、ん、の、お、ん、を、  
お、う、ぬ、ち、う、に、ん、を、お、う、ぬ、ー、ま、ん、ぢ、う、を、お、ん、に、と、  
わ、て、揚、枝、お、く、と、り、お、め、ち、う、に、お、ら、ち、お、う、と、



まづ大軍一師に食ち  
らるる法の要とては  
るまきの連動とて  
はふ限るに歸するの  
おめても此なる有る  
又亭主方にも常より  
中さんとあるに  
まきのとやいふこと  
肝要なり又當時は  
ちうとてやう又一  
杯中へ吸杯の如く  
中へありやうの時

箸のこともよく刻まはるべし  
 ○麵類くひやうの事  
 麵類はづけと下に其まゝ並なぶるをうさ  
 も一握りといひてさて猪口をとりて食ふ  
 べきなり其のちの猪口をふいにさらなぶる  
 へくふるゝ又汁をかゝり附るべしめづる  
 まで一歳後までも同じにせむのみつねを  
 てよゝされども又座敷のおにぎりゝ一膳のみ  
 定むべしづね組のものや食まゝとむる汁を  
 四の井へあまべしとてみ見て亭主も湯がけられ  
 かりとてくわれも湯がけその席はあべし  
 此事に心とくづるなき事とて汗をかかれ







[illegible]

下之卷目錄

|                                                                                                                           |    |                                                                                                            |    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 常 <small>とこ</small> の居 <small>ゐ</small> るひ <small>ひ</small> の <small>こ</small> り                                          | 二丁 | 茶 <small>ちや</small> とほ <small>とほ</small> 入 <small>い</small> る事                                             | 二丁 |
| 女 <small>め</small> 人 <small>ひと</small> は <small>は</small> 入 <small>い</small> る事                                           | 三丁 | 瓶 <small>びん</small> とま <small>ま</small> い <small>い</small> る事                                              | 二丁 |
| 主人 <small>しゅじん</small> 分 <small>ぶん</small> 作 <small>さく</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                   | 四丁 | 小刀 <small>せうたう</small> 糸 <small>いと</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                        | 三丁 |
| 同 <small>どう</small> 事 <small>じ</small> と <small>と</small> お <small>お</small> 話 <small>わ</small> は <small>は</small> る事     | 四丁 | 硯料紙 <small>えんりょうし</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                                         | 三丁 |
| 致 <small>いた</small> る人 <small>ひと</small> は物 <small>もの</small> や上 <small>うへ</small> る事                                     | 五丁 | 番金 <small>ばんぎん</small> 番金 <small>ばんぎん</small> 盒 <small>はち</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事 | 四丁 |
| 女 <small>め</small> 力 <small>ちから</small> の席 <small>せき</small> ふ <small>ふ</small> る事                                        | 五丁 | 文 <small>ぶん</small> 管 <small>かん</small> 指 <small>さし</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事       | 四丁 |
| 主客 <small>しゅきゃく</small> 後 <small>ご</small> 見 <small>み</small> 屋 <small>や</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事 | 五丁 | 小袖 <small>せうそで</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                                            | 五丁 |
| 水 <small>みづ</small> と糸 <small>いと</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                                         | 五丁 | 鼻紙 <small>はなし</small> と <small>と</small> あ <small>あ</small> る事                                             | 五丁 |



|          |    |         |    |
|----------|----|---------|----|
| 客と結ぶ事    | 六丁 | 湯とのむ事   | 七丁 |
| 人小振る事    | 七丁 | 湯漬乃事    | 六丁 |
| 床の間の足振る事 | 七丁 | 粥の喰う事   | 六丁 |
| 掛物のあはれ事  | 七丁 | 引肴此事    | 六丁 |
| 通ひの者ゐる事  | 六丁 | 茶乃の事    | 六丁 |
| 結ぶとく振る事  | 六丁 | 門道を乃事   | 六丁 |
| 阪つぎやうの事  | 六丁 | 香きやうの事  | 六丁 |
| 汁をかぬ事    | 六丁 | 組附浴乃圖   | 六丁 |
| 冷けつぎ振る事  | 六丁 | 武三献引返の事 | 六丁 |
| 湯つぎ振る事   | 六丁 | 和盛ぬき乃事  | 六丁 |
| 曲の者引返る事  | 六丁 |         |    |

|         |    |         |    |
|---------|----|---------|----|
| 阪と強る事   | 六丁 | 湯とのむ事   | 七丁 |
| 結と下は事   | 六丁 | 湯漬乃事    | 六丁 |
| 茶漬事なる事  | 六丁 | 粥の喰う事   | 六丁 |
| 曾後式なる事  | 六丁 | 引肴此事    | 六丁 |
| 見合乃事    | 六丁 | 茶乃の事    | 六丁 |
| 吉日と名ふる事 | 六丁 | 門道を乃事   | 六丁 |
| 目録乃圖    | 六丁 | 香きやうの事  | 六丁 |
| 結納の事    | 六丁 | 組附浴乃圖   | 六丁 |
| 持系おふ事   | 六丁 | 武三献引返の事 | 六丁 |
| 目録書換の事  | 六丁 | 和盛ぬき乃事  | 六丁 |
| 嫁入附り    | 六丁 |         |    |















分るうとねきふべうに  
 いふわうしにうらふた  
 とたてあふまふまふ  
 汗とぬぐいふまふ  
 うらふまふ

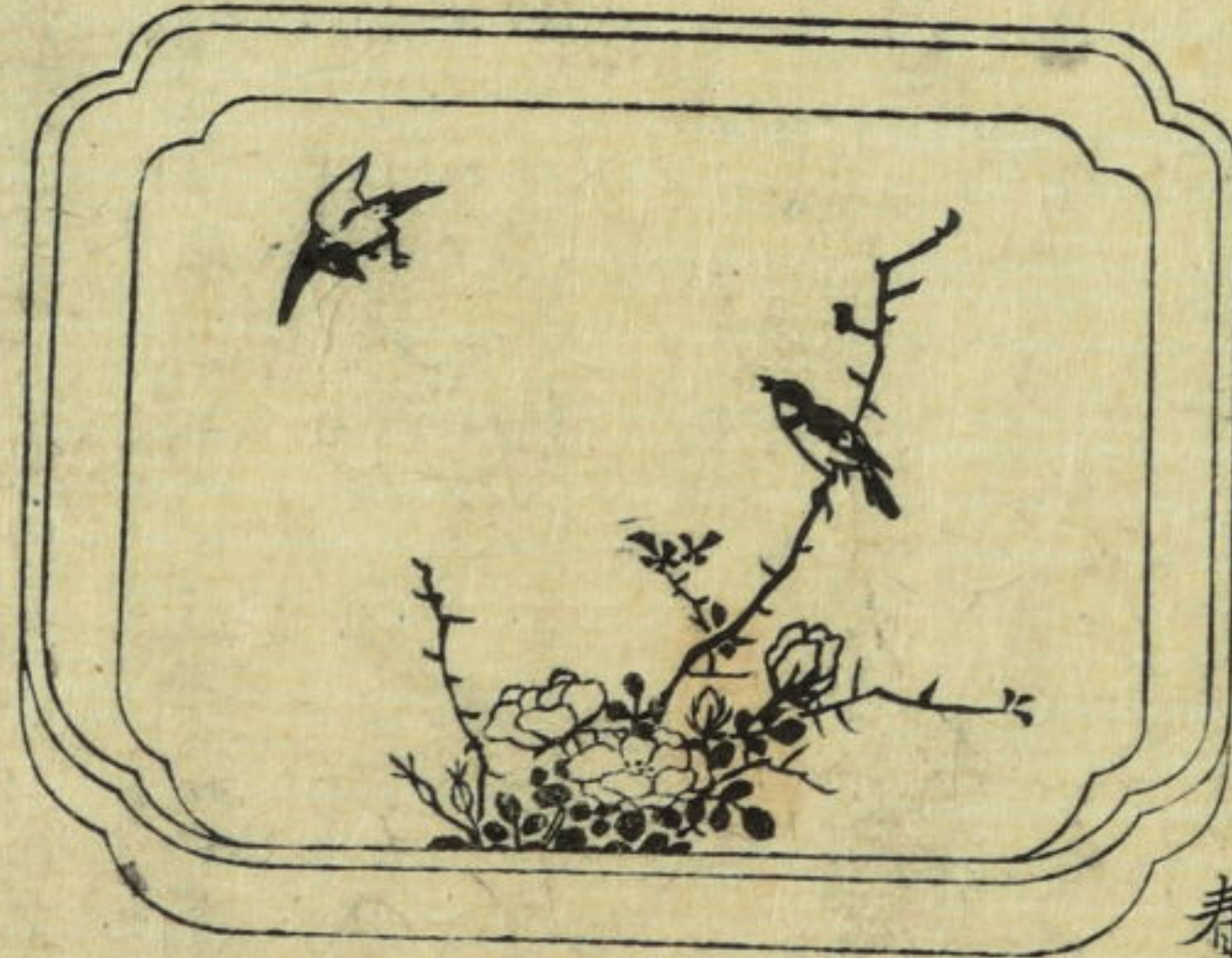


主人の方かきふとふと  
 ねの方になど一盡とふ  
 さいはふふふふふふ

○香盆香盒とねねの事

香盆香盒その外とて  
 まつとふ時人形事  
 ね市あふまふふふ  
 一とと主人ふふふ  
 金ふん純子流香で  
 とれいふふふふ  
 心ね一又香盆に香  
 盆とあふ

分るうとねきふべうに  
 いふわうしにうらふた  
 とたてあふまふまふ  
 汗とぬぐいふまふ  
 うらふまふ



春漢



合ふる香爐の中香盆  
 金ねり但一香爐  
 香爐と人よ  
 じふと心ね一



ふむとさうあぢ  
○文箱をさうの事  
こと

又箱と主人ふさううの封をあは其終つたべー  
封をさういひにふさうを又箱と我すくおねえ緒を  
しき我あへいさう蓋ととりて作けぬれ  
と我あへえさう蓋とあてぬの下のうをたられ  
もの大指をて押べーのうをえぬれううらし  
あううとををさう取と字のうういさう我あへ  
かー又箱の蓋のせををておひづりののを残そ  
うまのういべー又あううのうもさうさう箱

女法下ノ四

たのふとつて一回ひびくとおぬ  
たのひびくとたのぢぢの上  
きひみねとねのえ合はど  
おあぐやうけたあぐ  
○ぬの人ふかのやう時  
ちと我れとね人育てい  
べ則ちうづ息のわてぬ  
うとものうづひる  
○男のぢぢるおははれぢぢも  
かきにみうもあぐえは  
きうく女女同ぢぢぢ  
ぢぢるくぢぢ人のぢぢも  
ふたり  
○ぢぢぢの人ふのぢぢ



右のくねるへー  
 こねて まさ  
 ○小神をさへまふせぬり  
 こねて  
 小神とさへまふせぬり  
 まさ  
 ひづりの神と運させそ  
 こねて まさ  
 太の神と運しぬすれ  
 まさ  
 常の中神ととおてそ  
 まさ

上  
や  
ら  
る  
べ  
い

○<sup>まゝ</sup>鼻紙と<sup>まの</sup>まふと<sup>こと</sup>は事

毎紙に二重にたもと切目をひきふへし一紙たうの  
 袖の下にもちまゐる人のたの袖の下へまゐる也  
 ○楊枝まゐりせぬ事

○揚枝糸うねいをすの世やう乃事そと

揚枝ハ盆ひん子のどく中なかつハベハベーヤヤハ柄え邊うへ々



春溪

女流下，五



ふとれた方と主人の衣を着て参るに  
茶と茶を飲む事  
茶の茶基子のせきをかきつたのちを  
たりのちをかきつけておけり  
○席風立やうの事  
茶の上に彩色の下座く一雙のふたの  
中にとけりと下に立てー茶の味は  
下古茶の上の新茶の下にふたのとある  
茶へー立ち上るといふ井と二ふたけて茶は  
たかき井と

○燭臺を置く事  
燭臺はいれ一柱より貴客の人におきて

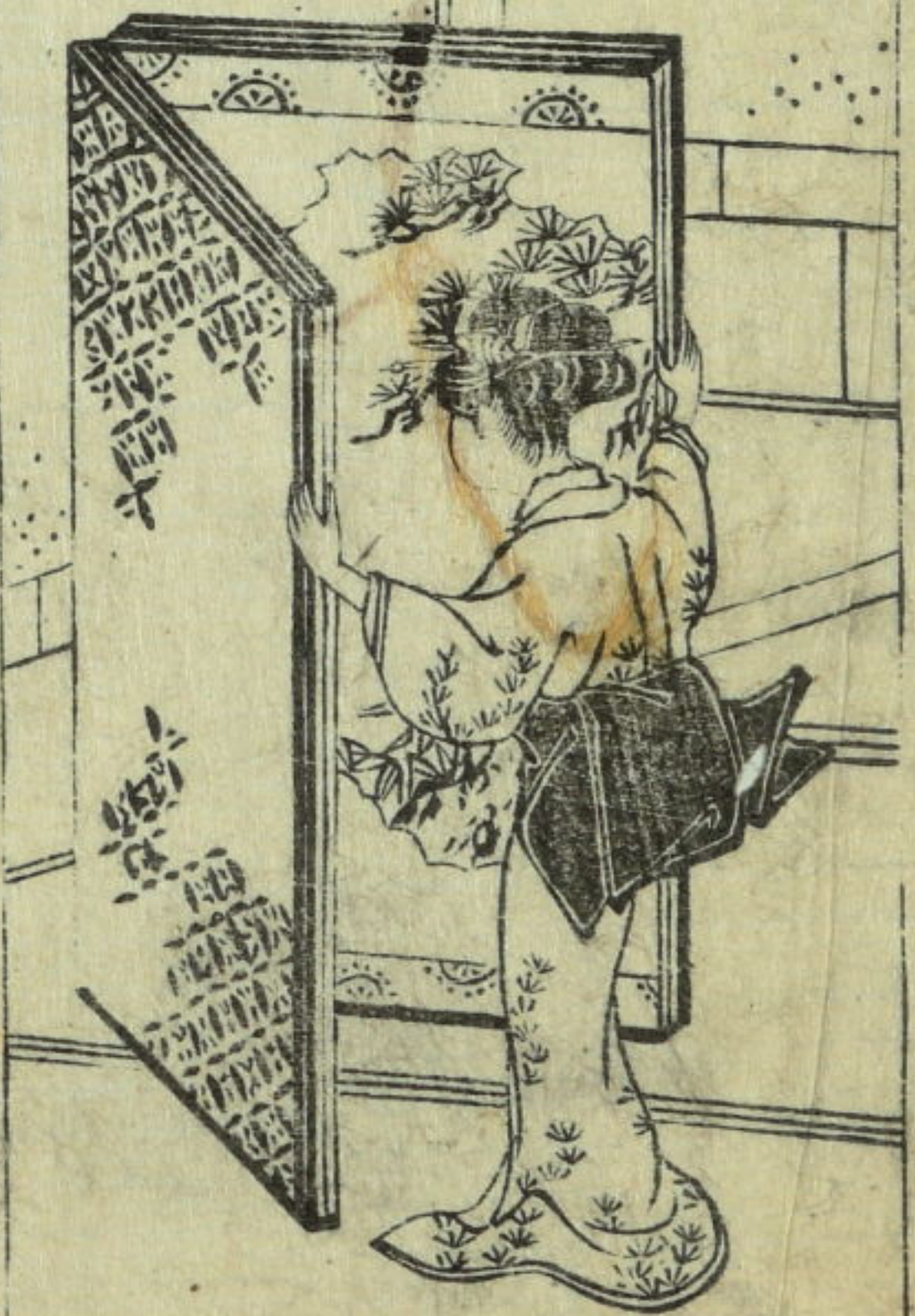


正月三日の日の水さぐり  
 法有る事いふまじりしに  
 ○おとけする時のみ先  
 第一は掃除を金とへし  
 勝へぬかぬおぼえに



春漢

べーちうー除り穢えへあそびたるいふは澄々個ー  
 是二三と主人のあひかゝりて是べー又掃除く乃  
 主人切やういぬあるとひら取あつて燭燭より  
 みまのうて切べー燭臺一挺の時へまなま  
 切てよー燭燭と焼くあつては後より手  
 燭ふそのおとけするあべー燭さうとに



女流下ノ六

床のいふと有るまじり  
 是の元夏の枕の葉冬  
 火とむっーうりあふれ  
 ーいひるうり  
 客接して料理運るは  
 るるるるるるるるる  
 吾や料理といふもあし  
 けつとあふれ先金とあし  
 けつとあふれ先金とあし  
 ○人おねえれり時あふ  
 運きも耳ーるるるる  
 たるべたひ用るあふ  
 是てけべー其あふ  
 てなあれ掃除うり



べーは個ー婚れの夜い切とあふとるる  
 ーる燭ふ焼くあつては後より手  
 ○大掃除の事  
 大掃除も燭臺のおとけ二三と客人のあひけ  
 是べー又大掃除あつては後より手  
 陽のあふとるあふとるあふとる





春溪  
来りぬる炭の上に置きて湯のたふあくるもね  
らとどく清うりたはたはなれりたる著る人  
の方れふちへせぬきてとどくべー

○門炭とく事

炭とくぬる炭其ふお等と取くして持つ  
ずただくはく下大と直一ぬただくはく  
正へぬる炭へはくはくはくはくはくはく  
お等とく大持のふちと掃ふべー炭炭の松れ  
足せなりす法の定りあり下に松系紙とぬる  
これいぬれすくはくはくはくはくはくはく

○解子きい指の事

解子のきい人のきいはくはくはくはくはくはく



春溪  
勝りかどんを一つて一はく  
かんを一つて一はく  
そのありおふえぬ一はく  
つて直一はくはくはくはく  
挨拶なれはくはくはくはく  
やうにきとくはくはくはく  
云ふはくはくはくはく



春溪  
思ふはくはくはくはくはくはくはく  
その時い二回ききてたりありはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

○種かつく時きききききききききききき

先一室の人と見合を挨拶して我はくはくはく  
よりいさ下りて坐はくはくはくはくはくはく





〇 陽子侯にてあけの事  
 いづくまでもあれ下座の方と申すまゝを出入せし  
 まなむう出入せむうはたのま成つておれをせ  
 りけなてとて

○後小居り根の事

七五二。五五三。五三二。  
おていまれうね事終ふさふせ愛にまじり  
別書よきく出せば夫と見えぬを――まづ拙は  
とり拙のまゝにい居るをわし角にむすべし

除くつぐと云ふ無なるは  
 ちの 却つて不れるれど  
 ちくあるあるを  
 何れよりたじと云ふ  
 どのの心をきひし  
 どもとば折るなりめ  
 んとつけてそれくお候ふ  
 ちくあるあるを  
 〇林の間のらんかういふむと  
 んく其のちをさめをうけ  
 三幅あけ掛あるるが一  
 中二さんあた二さんおを  
 んぐ一林のちをさめを  
 けてんぐりふにさるるを



うぢぢりねへうつ  
 汁しゆ挽ひ乃のうを取とる事  
 二汁しゆちをちにれをれを  
 るをるを阪はん挽ひとをちにたを乃  
 てに下をにをすを右をれを  
 ちをうをつを汁しゆをを吸をひ  
 右をのをちをれをてを下をちを  
 又をちをれをちをちを阪はんとをひ  
 汁しゆをを吸をひをまをををちをれを  
 挽ひつをちをちをれをちをれを  
 義を乃をちをちをちをれをちをれを  
 まをちをちをちをちをちをちを

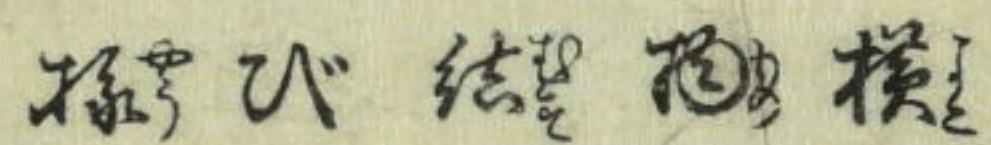












(う) 火垣(くわん)の音乃りの六酒(むしゅ)つ付水冬一湯(ゆ)のとるお  
ふは登ぬよの世志ろーあき女舟い若れねいあふ

ぬがうう年比と今年

よりてくる

櫛せみ  
 目め  
 下しも  
 也なり

○<sup>⑤</sup> 酒とのび事 <sup>こと</sup>

湯ゆををととおおののちちて

水みづが  
 ちやうど  
 一ひと茶ちやうに

[illegible]

ふりて焼くえん西せち

みぎうけたる

女流下ノ十七



○湯漬ゆづきの事こと

湯づけいまだに洗ひぬぐへて梳みきりてござふ

著せし中とて一面と七八にうけ

だー葉の番の物より含えて、その外著の

且つゝめと食ふ十夜と実をりと食ふ

ふしも魚イサナ  
ふで力書ヒツキの糸イト多々タタタ  
力西ヒツシ  
糸イト

一、（一） 一、（二） 一、（三） 一、（四） 一、（五） 一、（六） 一、（七） 一、（八） 一、（九） 一、（十） 一、（十一） 一、（十二） 一、（十三） 一、（十四） 一、（十五） 一、（十六） 一、（十七） 一、（十八） 一、（十九） 一、（二十） 一、（二十一） 一、（二十二） 一、（二十三） 一、（二十四） 一、（二十五） 一、（二十六） 一、（二十七） 一、（二十八） 一、（二十九） 一、（三十） 一、（三十一） 一、（三十二） 一、（三十三） 一、（三十四） 一、（三十五） 一、（三十六） 一、（三十七） 一、（三十八） 一、（三十九） 一、（四十） 一、（四十一） 一、（四十二） 一、（四十三） 一、（四十四） 一、（四十五） 一、（四十六） 一、（四十七） 一、（四十八） 一、（四十九） 一、（五十） 一、（五十一） 一、（五十二） 一、（五十三） 一、（五十四） 一、（五十五） 一、（五十六） 一、（五十七） 一、（五十八） 一、（五十九） 一、（六十） 一、（六十一） 一、（六十二） 一、（六十三） 一、（六十四） 一、（六十五） 一、（六十六） 一、（六十七） 一、（六十八） 一、（六十九） 一、（七十） 一、（七十一） 一、（七十二） 一、（七十三） 一、（七十四） 一、（七十五） 一、（七十六） 一、（七十七） 一、（七十八） 一、（七十九） 一、（八十） 一、（八十一） 一、（八十二） 一、（八十三） 一、（八十四） 一、（八十五） 一、（八十六） 一、（八十七） 一、（八十八） 一、（八十九） 一、（九十） 一、（九十一） 一、（九十二） 一、（九十三） 一、（九十四） 一、（九十五） 一、（九十六） 一、（九十七） 一、（九十八） 一、（九十九） 一、（一百）

とんご

陽江  
陽江

殊の喰やうに事

殊とくみ先汁とちどあみあへー  
あせみ汁と

うけぬうゝひき さいふ近も喰のこゝよこゝとんねあこゝ

○引者の事



春溪

主人より我へ自ら引抱ふて然るのふさを持て  
 往と立主人へ蓋を被さばて我に抱さる  
 たりのみつきておきて又く傾きここの往へ  
 歸る一又けのたゞさばものかねばに又ては  
 ○茶の乃事  
 茶の乃事のみく盛りして茶を煮るべし  
 中よりもや煮ては神をば同じ茶とんね  
 人の茶をといふといふ人又茶を煮る人  
 神んぞいふ事ぞに深りて早煮茶ハ咽喉の湯  
 茶を淫し凌ぐぬかれとみさばる  
 外は秘事に傳ふといふはつておもしろ  
 と知る一もそれとも茶事なるはつておもしろ



故に通ひと稱へて後へ  
 ○通ひふふふ人ハ既多んと  
 孫め清とあるふつけえや  
 かゝに違ふにいつまうぞ  
 めやうやまうとあへ  
 平生とてもこのぬれのは  
 ね行あるまじもむひれ  
 せうへねりてんともも  
 へー又あつてハ懐中まじ  
 入用のふふふとせり  
 ○登の緒とてうの甚れ  
 ひうれと我あへ  
 おまの中へふとれぬの  
 平にふふふのうとけ



書ゆふふふふふふ  
 一求わくふふふ  
 べー終れた女ふふふ  
 随ふふふふ其夫の  
 好さる事とぬきんで  
 明ふふふふにわふふ  
 諸ふふふふふふ  
 不孝不貞節ふふ  
 不にふふふへふふ  
 能ふふふ報ふふ  
 一夫は貞操とて



乃と身ふふふ何ふうり  
 行要なりふふふ茶と  
 世かれふふふ大概と  
 夫のふふふふふふ  
 てふふふふふふ  
 項とてふふふ  
 生のふふふ茶に  
 一ふふふふ茶  
 とあるふふふふふ  
 なる池のふふふふ  
 てふふふ茶のふふ  
 臨べーぬのふふ





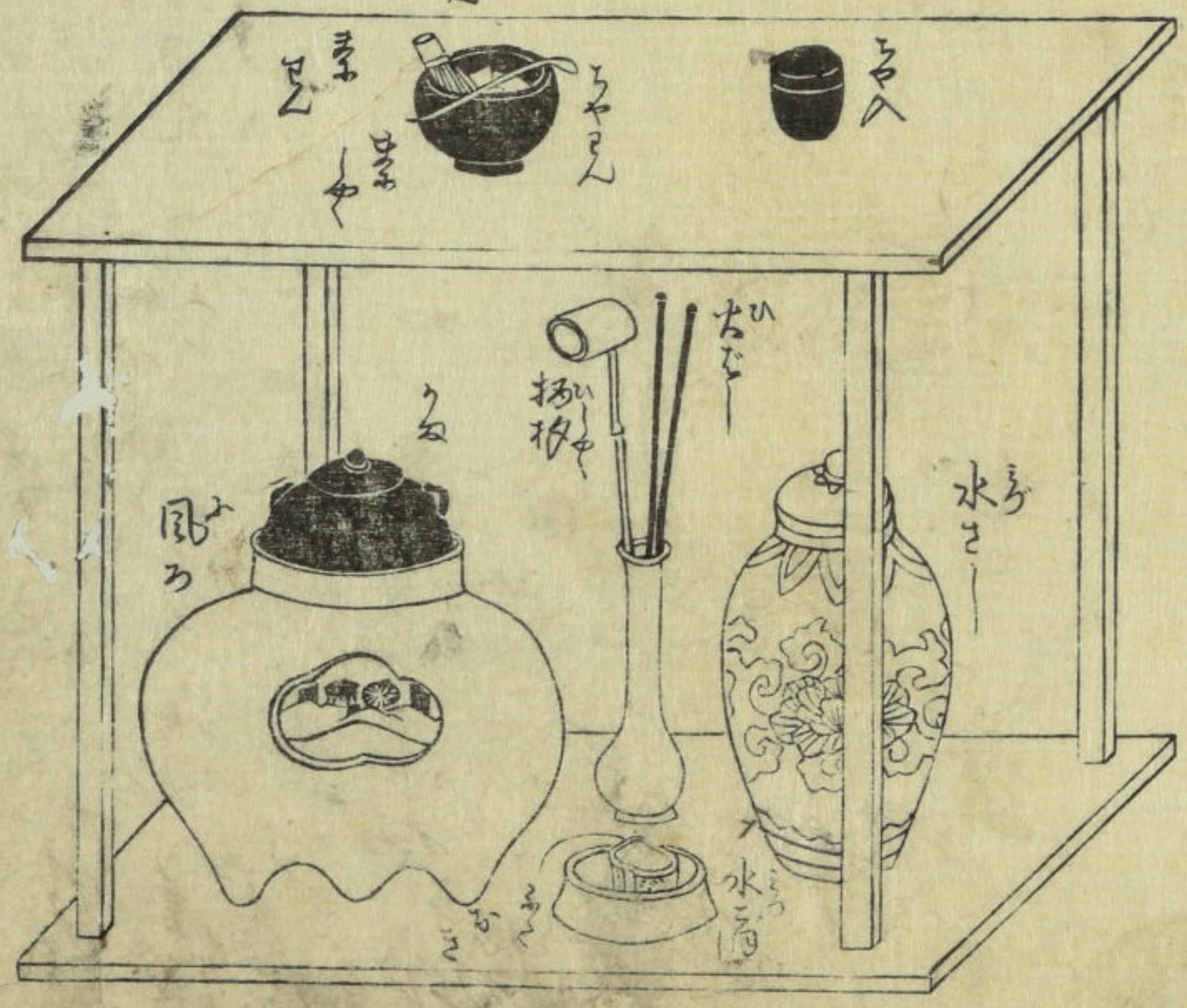
我身のからぬやうに  
下へておき  
ぬまの玉やうにいんたう  
の徳とつとこれ徳とつと  
さぬまを下へおきり



亭主のさせし入る茶碗とおく  
ぬく湯をく水に海へ  
おは茶碗にされし中  
茶のふける女へ茶を  
かりし向ふをえて  
或いそんは一ふたの  
湯者流の式とて一ふ  
まゝにふるぬる也  
も流武の二つとふ  
と一も不洗茶とて  
おひつりしきり  
と茶通を知りたる  
亭主のさせし入る茶碗とおく  
ぬく湯をく水に海へ  
おは茶碗にされし中  
茶のふける女へ茶を  
かりし向ふをえて  
或いそんは一ふたの  
湯者流の式とて一ふ  
まゝにふるぬる也  
も流武の二つとふ  
と一も不洗茶とて  
おひつりしきり  
と茶通を知りたる

かてたりのよとぬさ  
おひつりしきり  
と茶通を知りたる  
亭主のさせし入る茶碗とおく  
ぬく湯をく水に海へ  
おは茶碗にされし中  
茶のふける女へ茶を  
かりし向ふをえて  
或いそんは一ふたの  
湯者流の式とて一ふ  
まゝにふるぬる也  
も流武の二つとふ  
と一も不洗茶とて  
おひつりしきり  
と茶通を知りたる

茶のつくり





けしきあはれはてあのかうと  
 たちのかうにうけてあう  
 客へうへうへうのさう  
 あうへうへうへうへう  
 さうへうへうへうへう  
 てうへうへうへうへう  
 ○そへうへうへうへう  
 持てあうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう

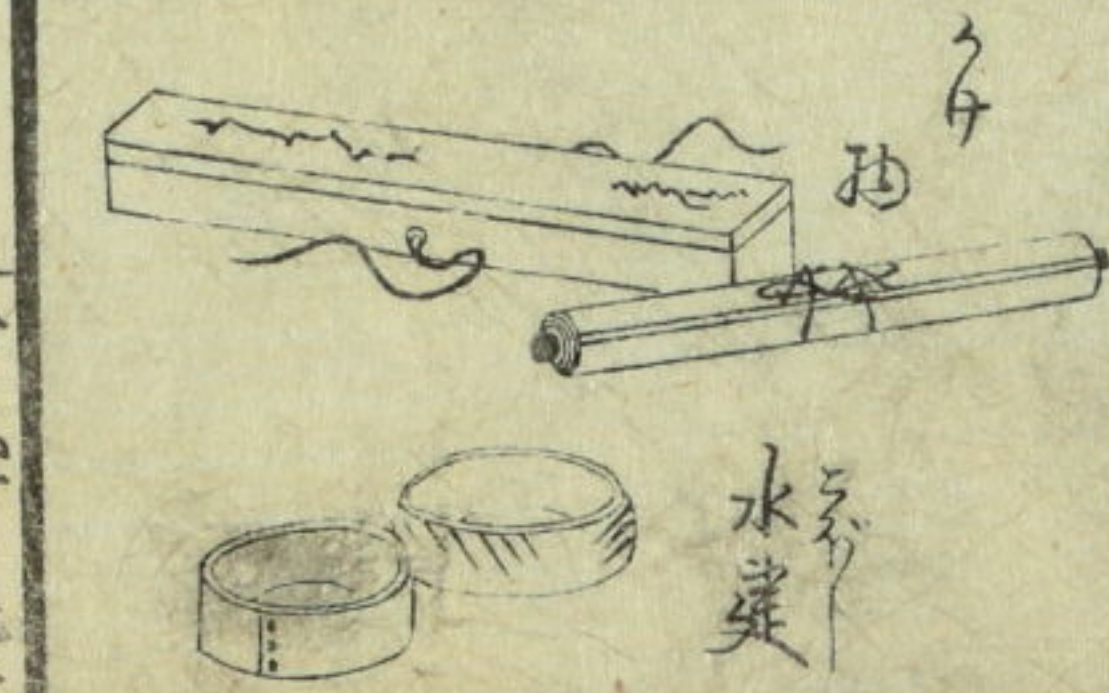


てうへうへうへうへう  
 ○そへうへうへうへう  
 持てあうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう  
 へうへうへうへうへう





何の事でも振ふとて  
 阪の舟とたをへさし  
 其の中を二とくいつまで  
 又又此の時たのさう  
 ついたの事をいつまで  
 かり阪へそんたりた血  
 ちくちくするさ其外  
 のとれさうの時たをへさ  
 ちくちくするさ  
 のけさうの盆をてこの  
 へ客へより盆をせに  
 してさうの盆をてこの  
 猪より余のさうて  
 ちくちくするさ



女流下九六

ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ  
 ちくちくするさ

事大不後へゆに其あるの中に功者有  
 かれ其人中尋ねてあるなりとて  
 事大不後へゆに其あるの中に功者有  
 かれ其人中尋ねてあるなりとて  
 事大不後へゆに其あるの中に功者有  
 かれ其人中尋ねてあるなりとて



事大不後へゆに其あるの中に功者有  
 かれ其人中尋ねてあるなりとて  
 事大不後へゆに其あるの中に功者有  
 かれ其人中尋ねてあるなりとて



高砂 (たかさご)   
 大筋 (おほえぢい)   
 香口 (かうこう)   
 箸 (はし)   
 灰押 (はいおし)   
 大味 (おほあじ)   
 銀炙 (ぎんあし)   
 折長 (おりなが)   
 姫燭入 (ひめろういり)   
 銀象入 (ぎんぞういり)

十姬番之記

三二ウニ二三二一三二

若松 一三二四二五三

紅梅 三十二丁ウ三三三

白葉 ㄅㄛˊ ㄛㄣˊ ㄛㄣˊ ㄛㄣˊ ㄛㄣˊ ㄛㄣˊ

水仙一三二三二二三三

異竹 三十一 三十二 三十三

同  
日

亭号

江戸のまふまふの町と目と  
 まふまふの下に甚まふまふ  
 名ふあつひの席をわづ  
 をまふまふ

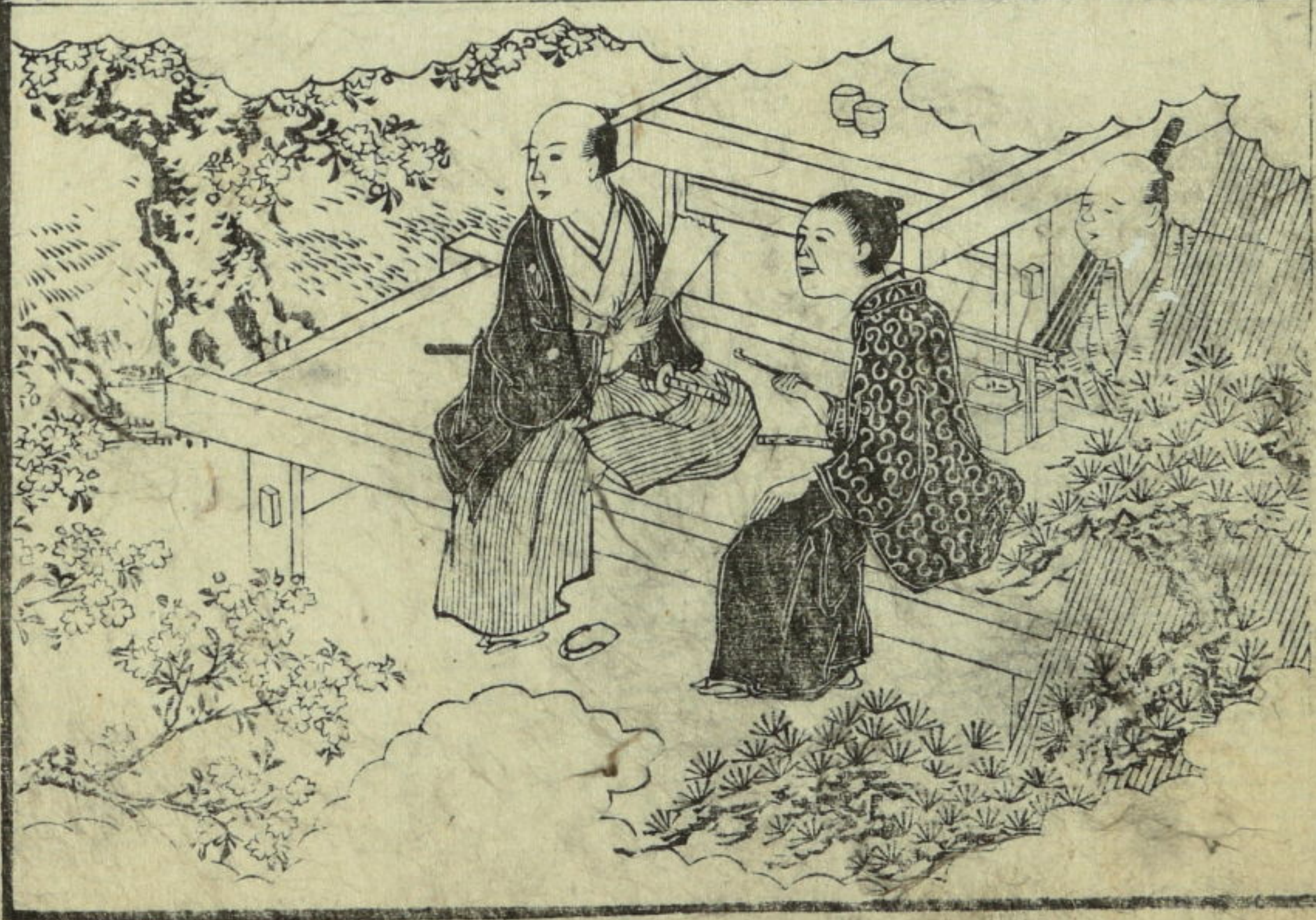






○見合の事

夫婦の縁をむすぶやういふはさう  
 ざれぬやうに縁は天目客の  
 見合とあつては相懇の作と  
 見あつては媒の實業とぬく取  
 縁と申也仲人の言をけあふれ  
 定規として双方を長をふ  
 めのわかれは解お病ふ外何  
 かあふにわくも色まに語る  
 御うさうのふと時ふく孫く長  
 久の指とて一ふて来く双方の  
 縁とひきり又酒をぬてそり結ぶ

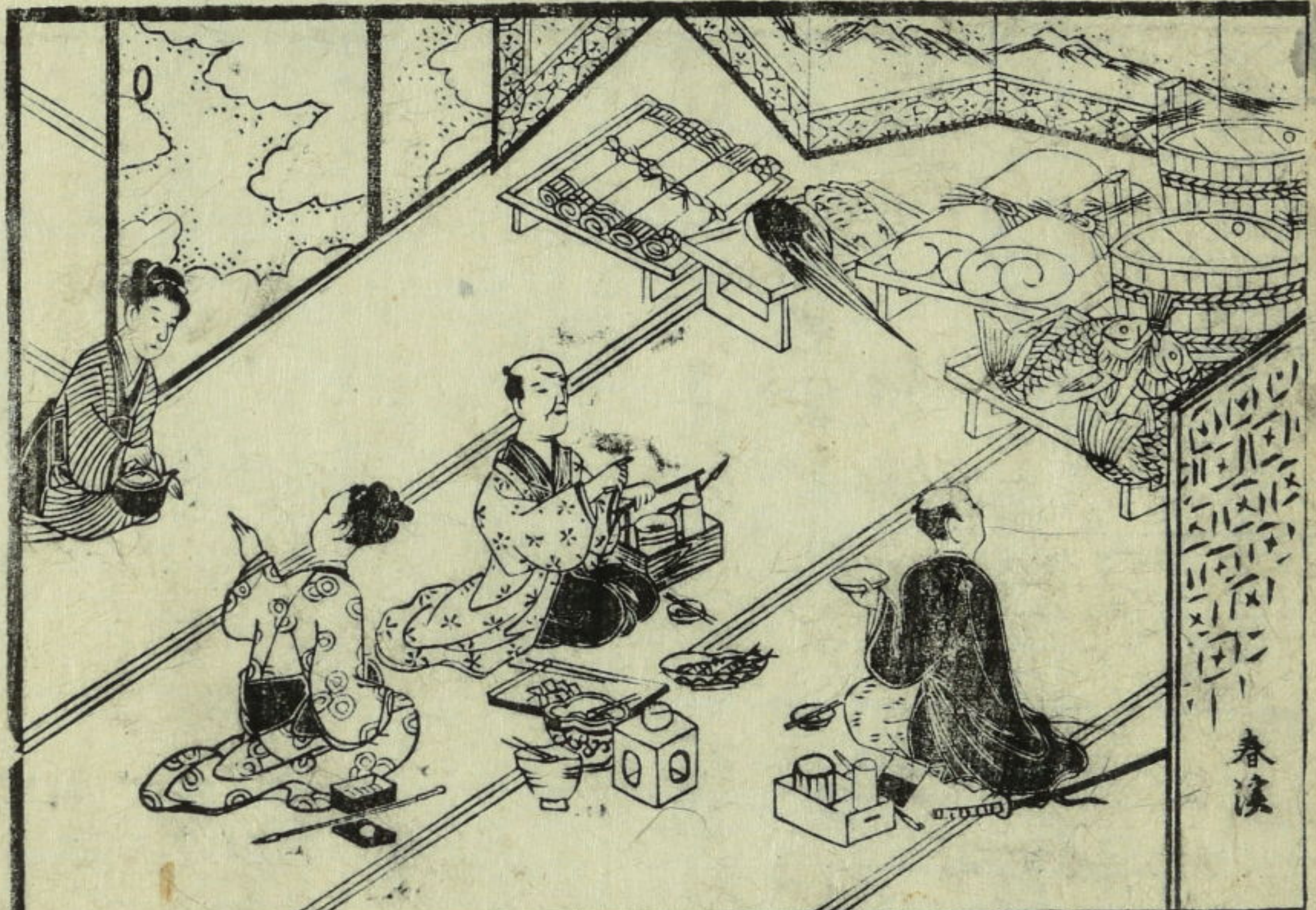


女流下ノ丹九

と江戸目く小相違からて家内乃  
 不台止ゆとゆと終る付はあ親の心  
 ちもも満ちて物もそれあれ破  
 ちも及ぶ一候も媒さる人いどふん  
 正あて実をてぬて取汁とて  
 又算のふぬとさうい好む利銀  
 ちもどたが孝婦とめとる一  
 孝心の婦女貞操とてくさる  
 子賢れは一に婦女と要い身  
 親への孝行なればあ清らう得  
 たがひるくともういふが相續  
 世人中幾許う目あけうふんや







春溪

○吉日と撰ぶ事  
 結納の席のかんたう嫁入り中  
 ともかくややと撰ぶ事俗に  
 ちがいて大概お多うひてもふ  
 へいさきより仕来る事かれ  
 ども又法々かりし事一に  
 いちやとあれば古西人よりて目  
 くらとゆふ初子と入る事  
 むふ吉日と撰びつうたる子目  
 小の吉日一かりし事  
 ねては目よりたえへ一とれども  
 同日同村入事とせざる子も生

だちやうてきりなりたる時たぐい  
 撰ぶ事一に事なりたる天赦日なり  
 まれ一人今日天赦日なりとて免  
 人の意をとりしむる人收す事  
 おろやう大者の相性  
 あく縁を組たりとて其女  
 夫不負ふればやの家  
 さく子孫相留るるや  
 お性わくとも女の心真  
 標い一親妻を大でつ小  
 せはむわくたのむ人や  
 終れば只撰ぶ事いなり

|    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|
| 細帯 | 紅綿 | 白綿 | 紅綿 | 白綿 | 細帯 |
| 細帯 | 紅綿 | 白綿 | 紅綿 | 白綿 | 細帯 |
| 細帯 | 紅綿 | 白綿 | 紅綿 | 白綿 | 細帯 |
| 細帯 | 紅綿 | 白綿 | 紅綿 | 白綿 | 細帯 |

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 草 | 長 | 帯 | 屏 | 琴 | 映 | 雜 |
| 草 | 長 | 帯 | 屏 | 琴 | 映 | 雜 |
| 草 | 長 | 帯 | 屏 | 琴 | 映 | 雜 |
| 草 | 長 | 帯 | 屏 | 琴 | 映 | 雜 |



○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

○結納目録ハ目録也

目録

目録

目録

目録

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

○嫁入行物目録ハ双方

嫁入行物目録

嫁入行物目録

嫁入行物目録

嫁入行物目録

一 地 黒 一 白 罌 垢

一 莖 垢

○帷子類右同新

一 給 類 一 單 物

一 お び 一 浴 衣

一 は ぎ 一 巾 着

一 夜 具 一 蒲 團

一 ま くら 一 た ば

一 蚊 帳 一 床 ござ

一 硯 箱 一 料 紙

一 針 箱 一 張 紙

一 包 巾 一 櫛 篦

一 櫛 臺 一 〇 鏡 臺

一 鏡 臺 一 鏡 立

一 珠 簾 一 毛 ぬ ぎ

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 文 箱 一 刺 刀 箱

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 双 六 盤 一 香 乃 具

一 文 簾 一 見 臺

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇



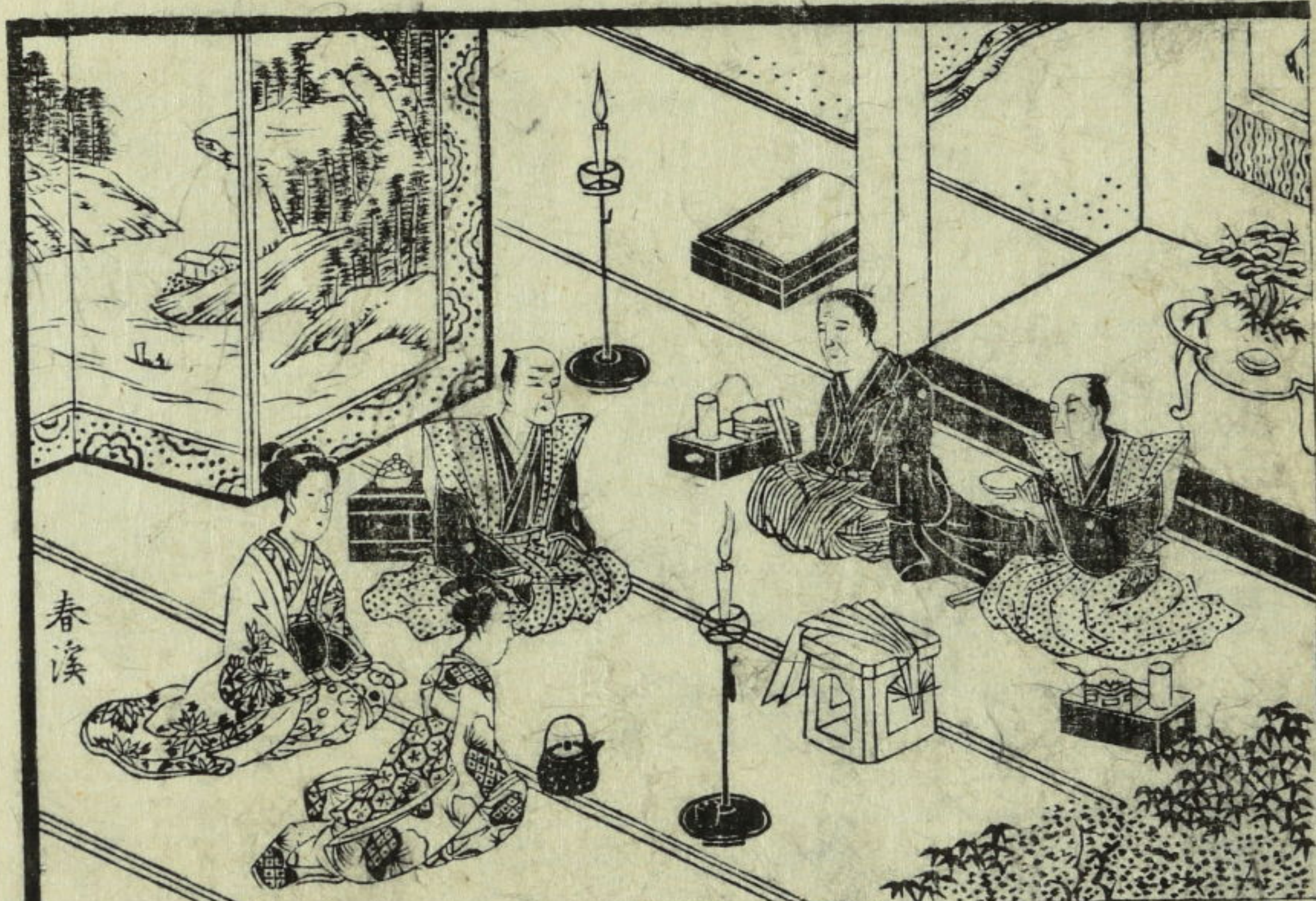
|        |       |       |       |       |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| 一 加げき  | 一 襦かひ | 一 小人形 | 一 大張子 | 一 雪燭箱 |
| 一 帽子   | 一 細ぼり | 一 大蛇  | 一 角だる | ○ 道具敷 |
| 一 手拭   | 一 紅糸袋 | 一 かき板 | 一 水引  | 一 所針子 |
| ○ 懐中くろ |       | 一 のー  | 一 絹糸  | 一 貝桶  |
| 一 白ひ袋  | 一 異紙袋 | 一 夢桶  | 一 篠   | 一 行桶  |
| 一 楊枝   | 一 簪   | 一 綿張  | 一 本綿糸 | 一 長持  |
| 一 下駄   | 一 番づ  | 一 刻た  | 一 寄置  | 一 葛籠  |
| 一 本親   |       | 一 同孫  | 一 同箸  | 一 換箱  |
| 一 百人一首 | 一 伊賀抱 | 一 うちん | 一 扇子  | ○ 紙敷  |

|        |       |       |      |       |
|--------|-------|-------|------|-------|
| 一 流鈴草  | 一 源氏枕 | 一 手箱  | 一 手箱 | 一 手箱  |
| 一 湖月集  | 一 世代枕 | 一 紗   | 一 守刀 | 一 扇用  |
| 一 十二代集 | 一 万葉集 | ○ 客道具 |      | 一 松原  |
| 一 一花   | 一 一花  | 一 茶碗  | 一 茶  | 一 奉書  |
| 一 女四書  | 一 系紙類 | 一 盃   | 一 盃  | 一 尺   |
| 一 糸    | 一 一糸  | 一 食籠  | 一 かん | 一 直紙  |
| 一 貝合   | 一 小倉  | 一 小室箱 | 一 枕箱 | 一 右大畧 |

○ 婚姻結納の事

一 媒どりのく婚姻のりと定め簪の方より結納をつのり





春溪

と常陸の役とてり俗に云  
今もれとのやとものへあはれ  
ひい三つ二種一符一符なり又新  
八後へい斗橋十有五種なり有ハ  
昆布湯塩細串他種一—ホナリ  
又小袖のりハ一重二重と之やも  
皆端あきく雲小様なり小袖一  
重のちハ一裏衣も向ハ一ハ衣  
紅を裏ハ海魚もて見合たり—  
何れも一端で小板の包と之様  
紙二枚でや中と水引にて結ぶ  
—是より下おびりてハ何れも

賜わりをわぐ第一の船ハヤ—  
二船ともれり大おと—あ累—  
たるおち代と金銀も海にう

○目録書換の事—

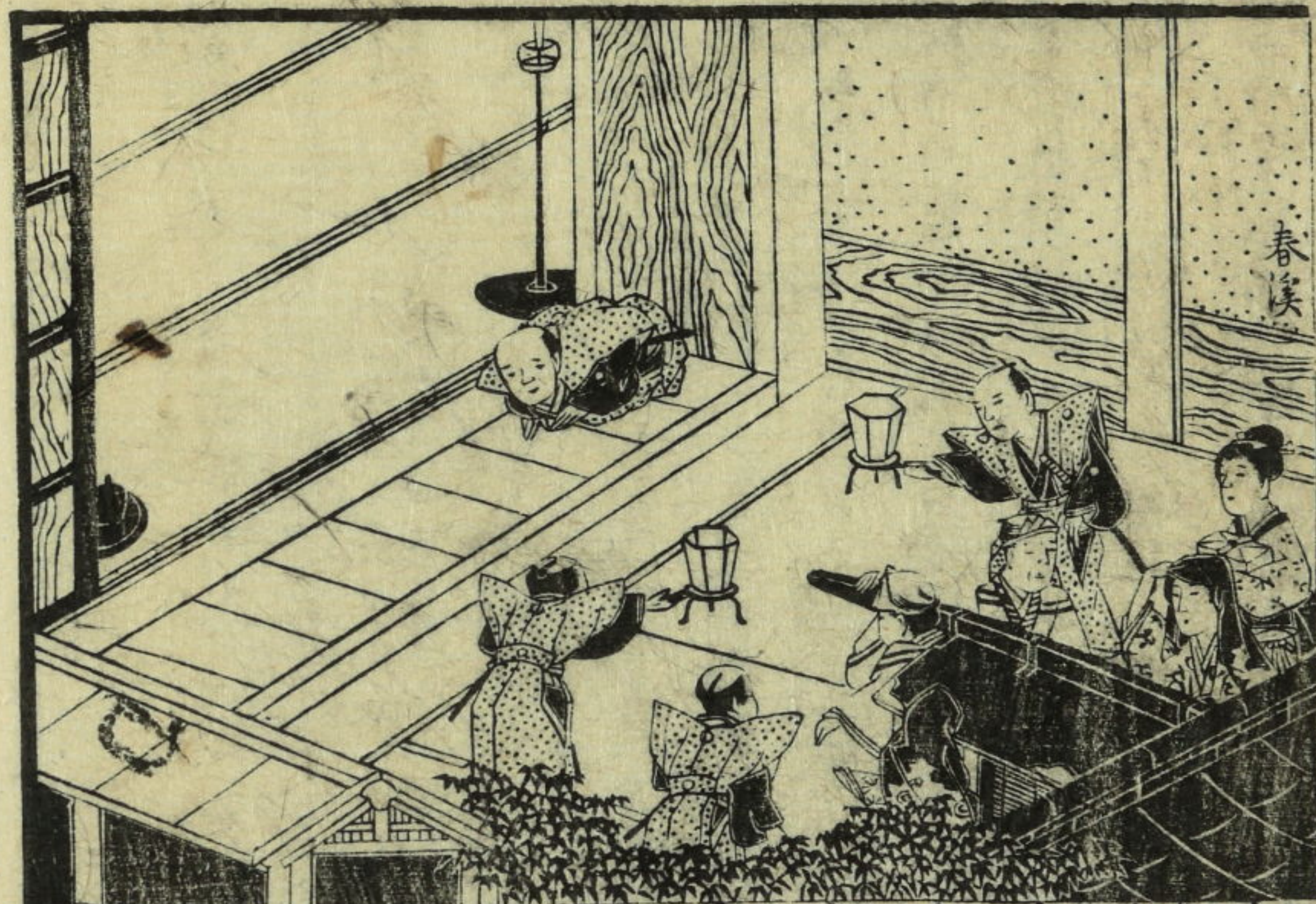
目録の書うハ女れとてし事  
なれどもちるこふ—く愛おま  
園のおちく細と始りよひてさて



春溪

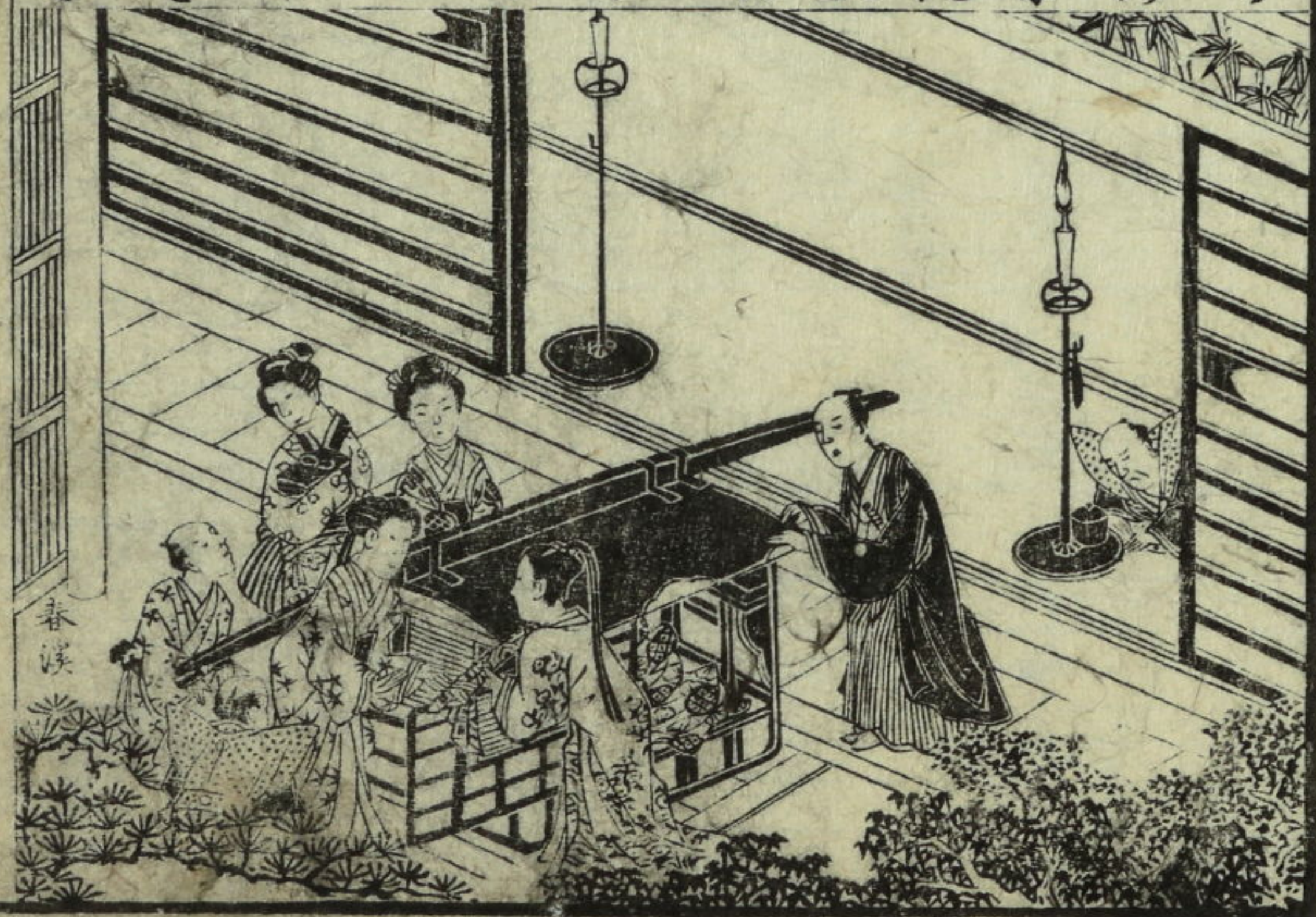
常少袖と次お書て留ハ昆布—  
おて橋や—あるわりの—も細  
道具の目録ハ景のごく書—  
—おの多ハお准じてお—  
○嫁入の事—  
嫁入の吉日ハ智の—  
—出立の—に内お—  
—





春漢  
 やくし白き垢をさるるのハ秋義乃  
 中式なり燈火を焼ハむうーり  
 有式なり故室へ回舎めてハ炬の元  
 ハ春さるるのハのちまのりー二十六  
 ちなる紙たりハ焼をさるるさて響  
 ハのちまのり前にさるーむ器ー  
 ておぼれわれども中道おらるど結  
 納さるて響入つさる嫁入り式  
 法ハ大概嫁入ふさるるさるー  
 ○祭相文おらるーれ事  
 嫁の祭相嫁さる専さるさるなり  
 其の響さるて祭おらるさるさる

春漢  
 是る中故室さるるを焼てそのさる  
 肉さるるハおぼれ女師いさるさるの  
 うさるさる刀と取ハ藥法のハ人ハ  
 法ハ大概嫁入ふさるるさるさる  
 衣さるハ他法さるさるハ衣紋法ハ  
 を解めさるさるハおぼれさるさる  
 かいさるの女ハ法さるさるハおぼれ  
 ハさるさるハおぼれさるさるハおぼれ  
 此方の座ハおぼれさるさるハおぼれ  
 座さるの外のさるさるさるさるさる  
 坐さるさるさるさるさるさるさる  
 さるさるさるさるさるさるさるさる





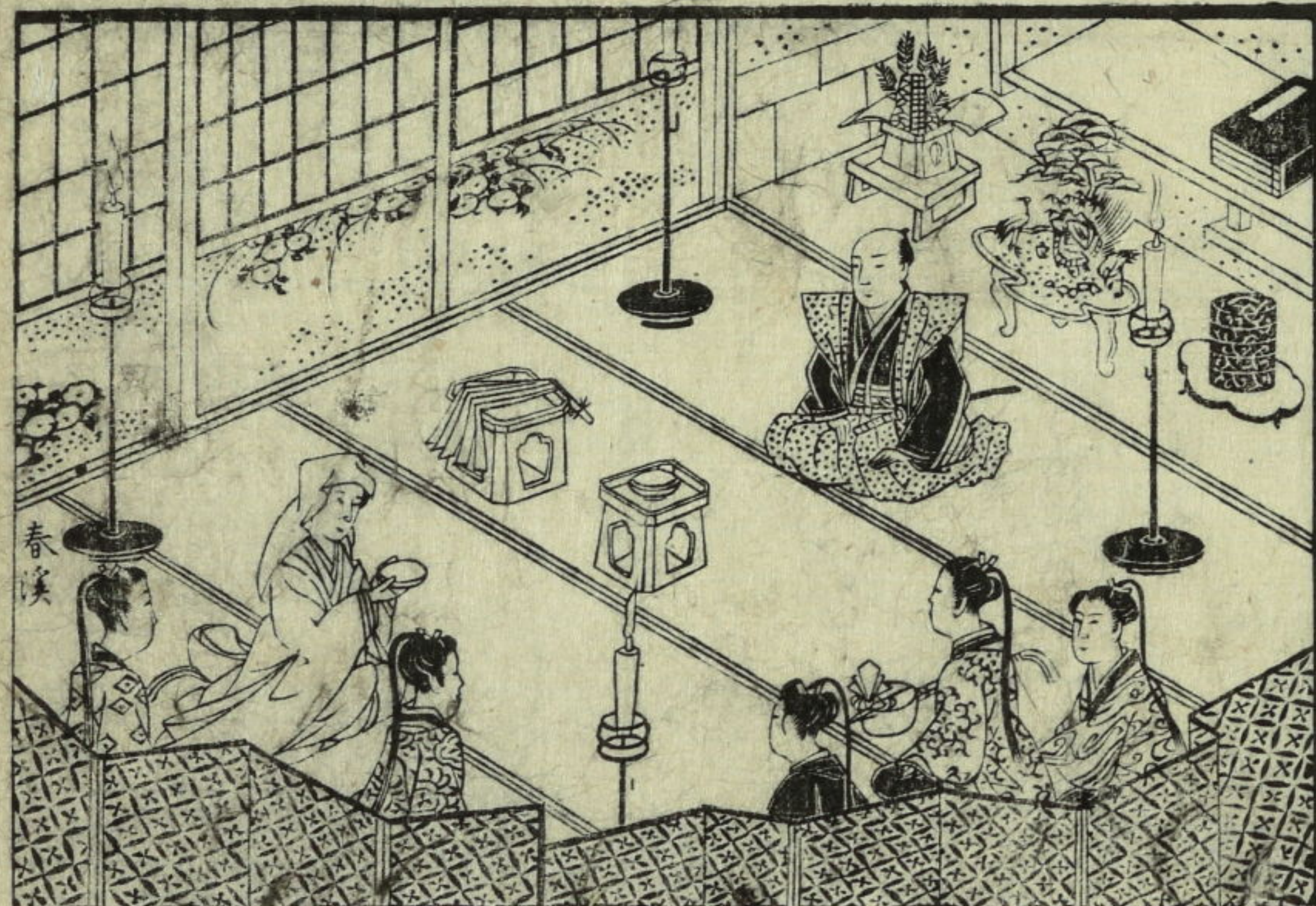
のせしむるお嫁とやうなとほろり  
かてお出さる女直に上りお出さる  
そのうちいそいそと出をかり

○婿の盃は半一 婿の仕度  
婿の夜嫁り盃とてわげ

小と足むうううれ放実ありむ

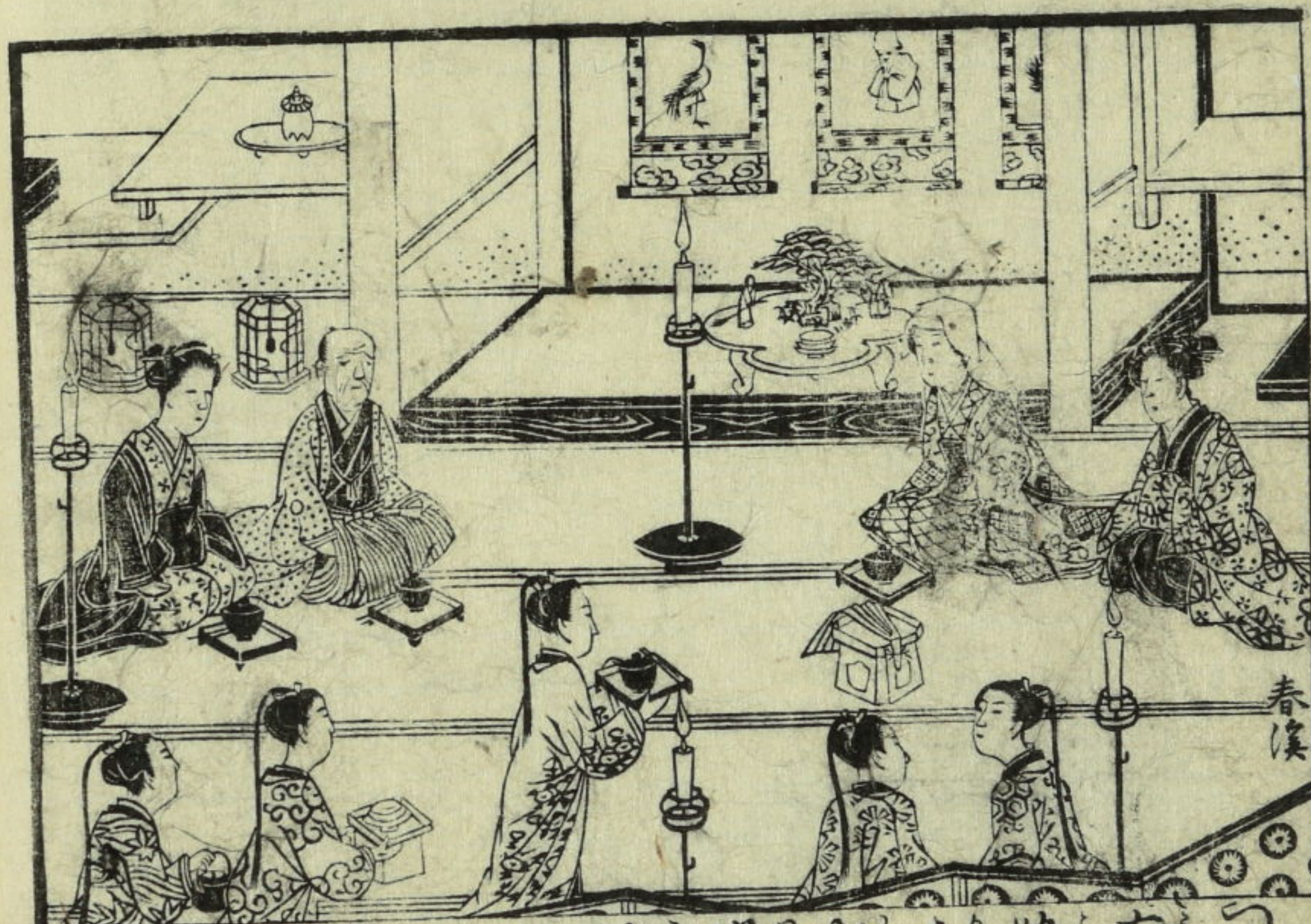
いらくと此半つと認むとどる古代りは来る通ぐ  
へく盃あり足と足屋の盃といふ此時に男一りのことめ女一つりする

○真の祝言の式三献といふとかり前もいふめく足は所は通用の式也  
お人お人づから加へ舞をさふりて居るへ長柄の年々いそいそこれ  
方へあつてお柄おるううううの盃と取て男のすいひひきとり  
て嫁のおふと盃を分給ふと取酒とてうけて嫁おるううううと飲



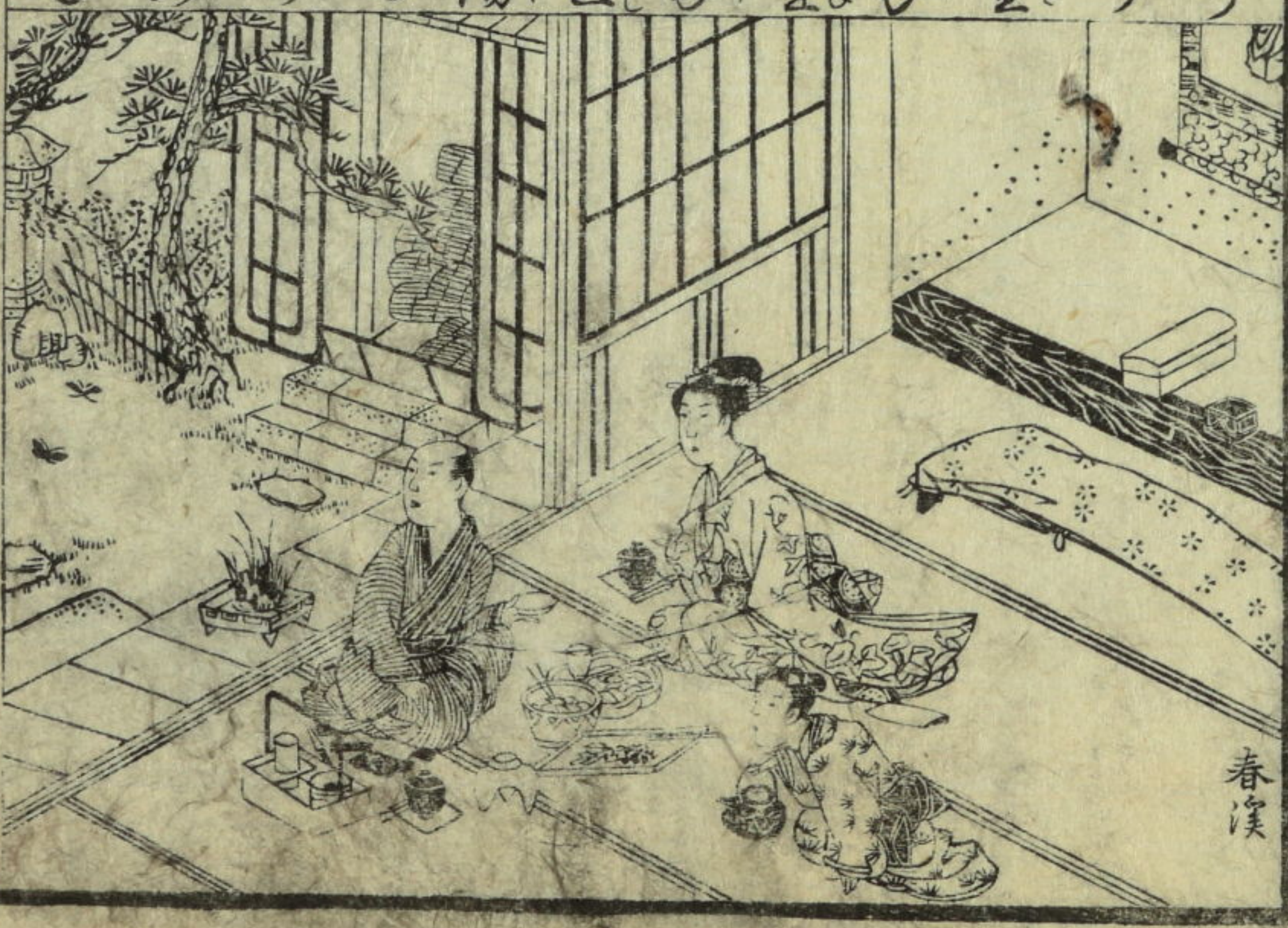
一献加へ又飲べー 婿のお出のす  
立て下中へ長柄と下小盃加へ  
嫁の方へつて三献目といふ嫁三献  
目氏加へ飲て盃と取ふかく足より  
お人盃とて舞のうへおるへー  
舞その盃とて酒とて飲る  
加へるお出いそいそと出をかり  
の下へお出さる女直に上りお出さる  
お出さる女直に上りお出さる  
お出さる女直に上りお出さる





つゝなるに其の如く二つの目の蓋をして  
 右のどく三度加へると嫁小こや  
 嫁も又おのおく春て其の如く一の  
 市もこれ船盛とせよとて一おま  
 或の時傷者として經の身とて  
 作り同く傷と小口切やして二の上  
 右組たり組の體とて味をて煮て  
 生とて毎盛の海をにけりて中  
 らち此是に思せしめくは船盛  
 板目の蓋をして其の二つの目の蓋をして  
 一聳もあれ如く飲て納るゝつと  
 二なづかへ飲ては二と九なとかり

秘人お人おて外はお人瓶子の役あり  
 始めより瓶子の役ありお人おて  
 女蝶の瓶子と取て蝶とあてつけ  
 酒を提へつゝ又一人の男蝶の瓶子  
 とて蝶とつて女蝶の瓶子  
 並にけと長柄の瓶子とあてつけ  
 一りのや蝶と指と有る中  
 一対の女蝶男とて附るなり  
 瓶の二足歩で加へ加のねは  
 べし此の如くお人おて瓶子の役あり  
 其の合中お人おてお人おて





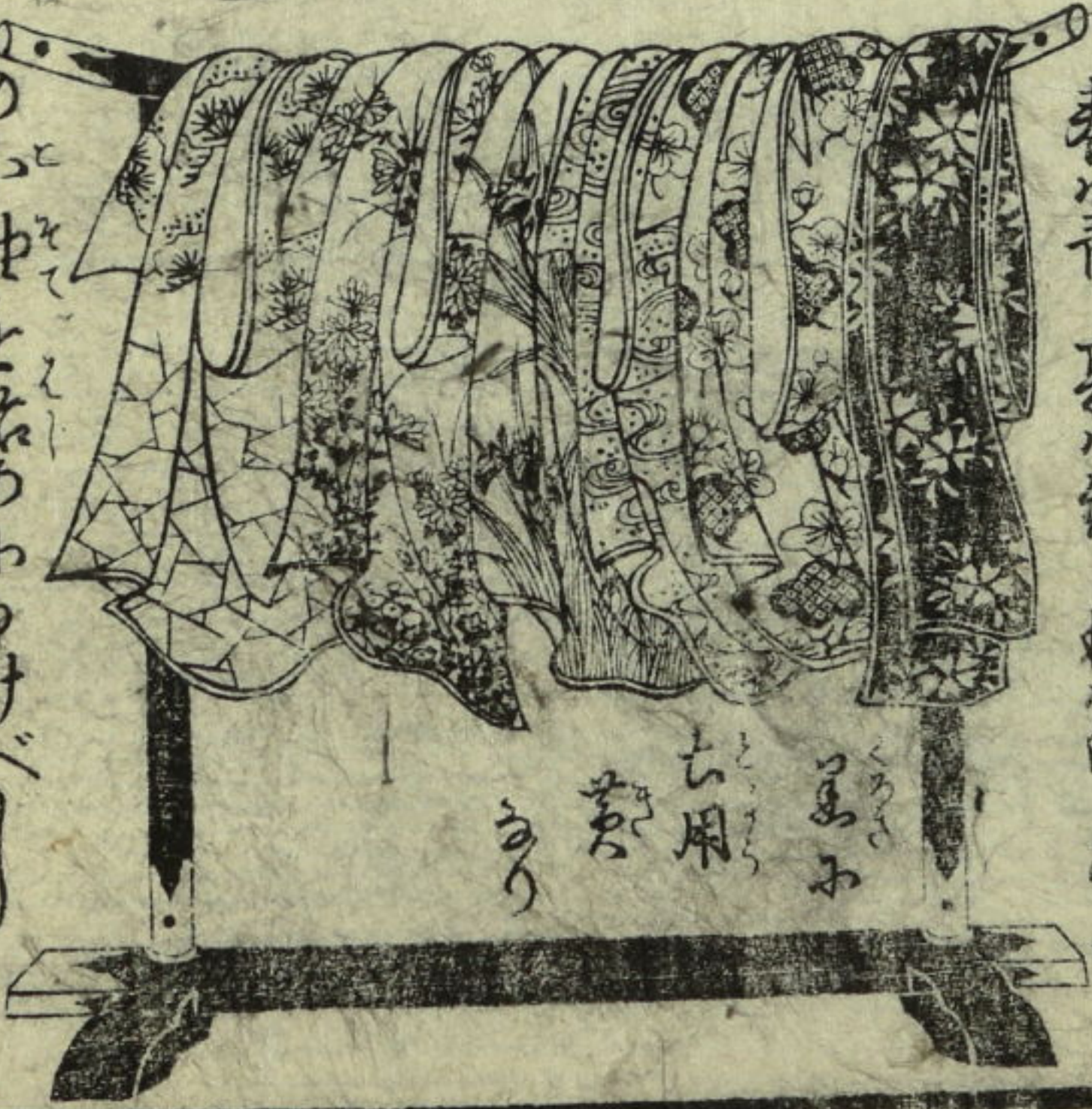




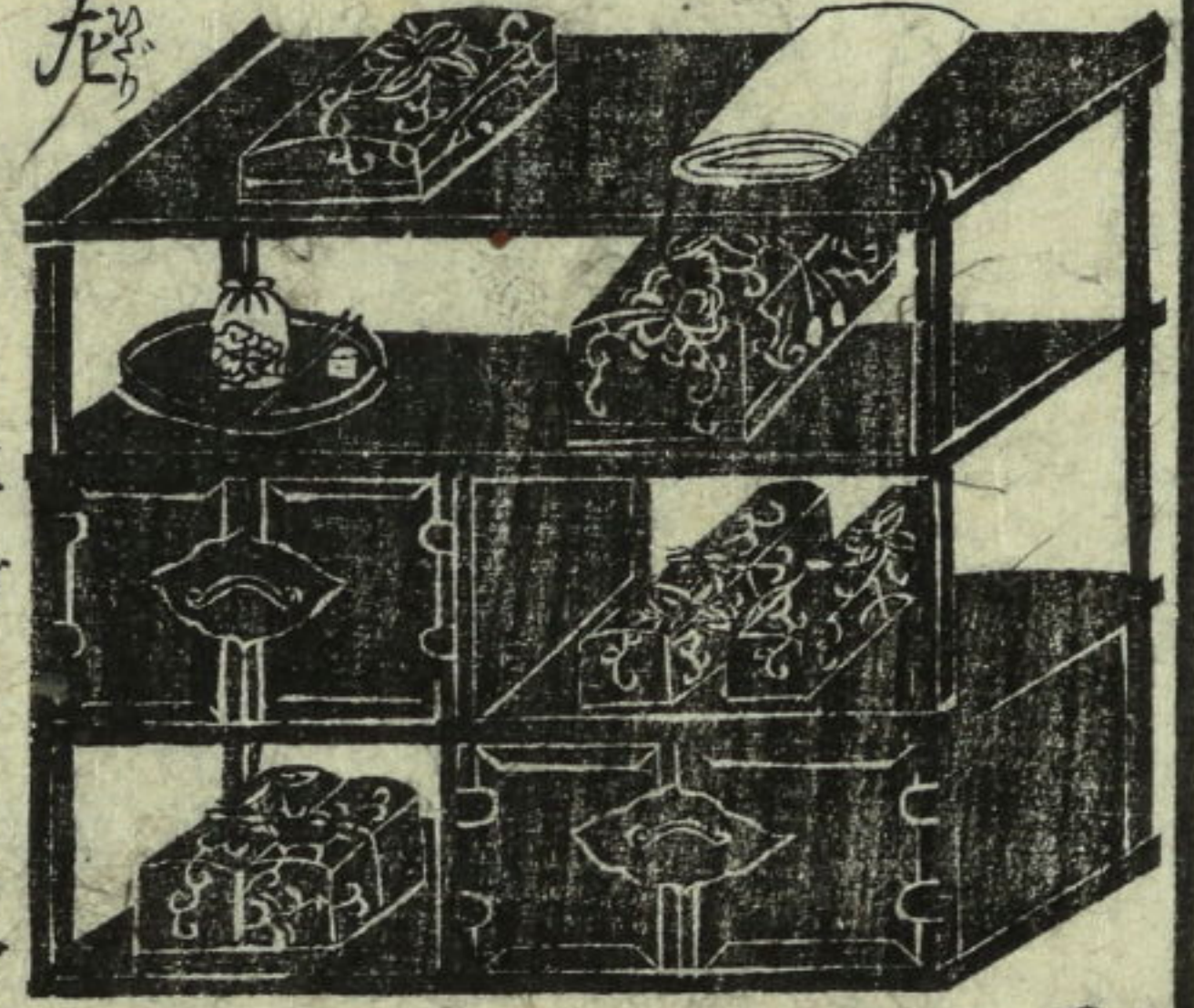
何んや何ほど煙くせし 祝言うた和しと思ふべしに 緋ひか二缺七六  
 こと細き女男の女と煙し 女男と綴るうきうき 緋ひか二缺七六  
 あり 背欄の大事の只 主婦中よりこそ目をなれ

○衣櫛勝り乃事

衣櫛 小袖をひるひ女の意ねの上  
 ぐをよみたる袖ひして 衣櫛とて勝  
 り男の袖ひ下ぐをよみたる袖ひ  
 とひかりてでたりみよて中より  
 上より 衣櫛ひたる袖ひとて 衣櫛  
 二節うけり又袖ひと中より二つ  
 おろてふふ二つは二つ勝りもなり  
 いづれもいふふなり 其時おのいろ



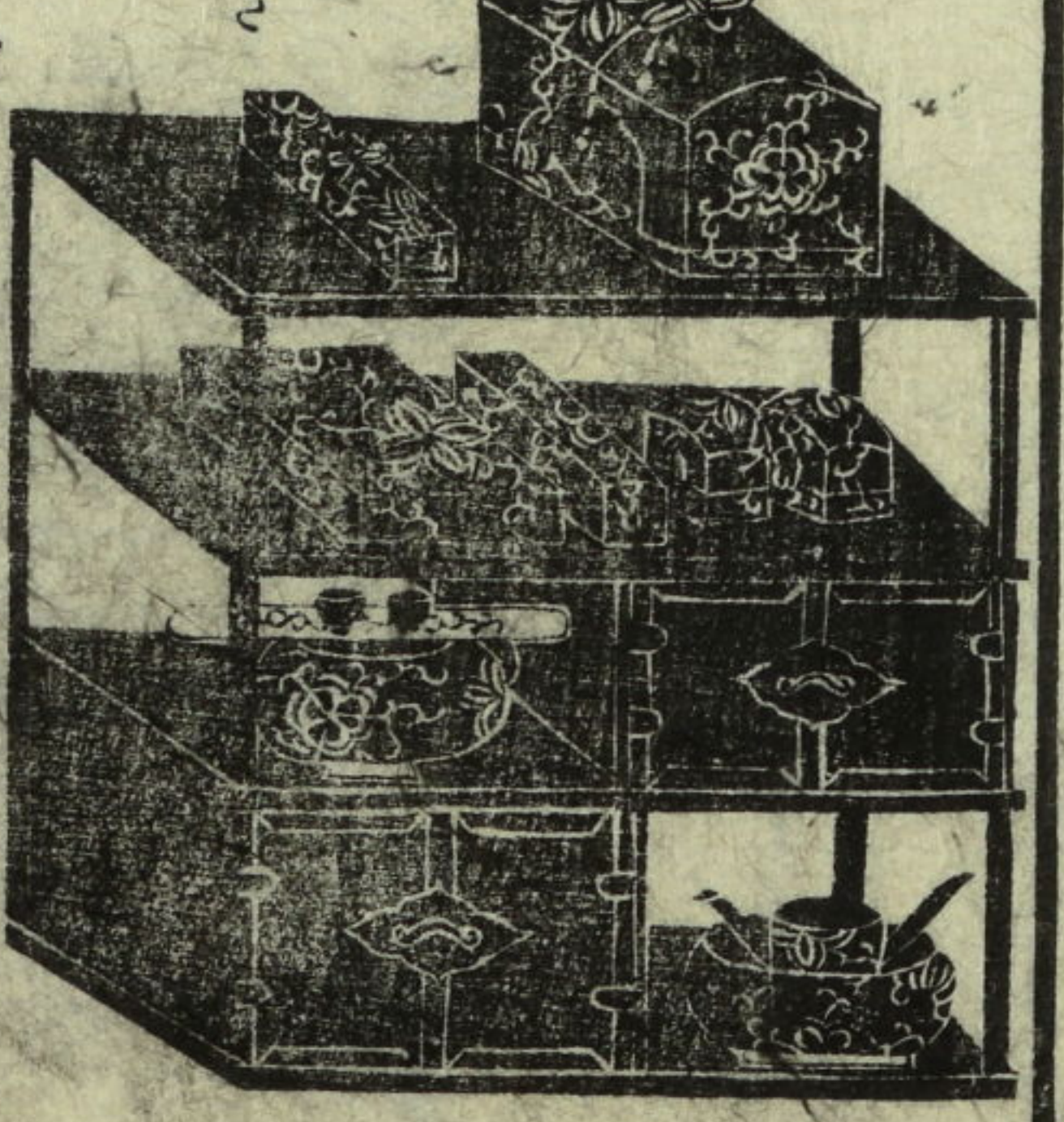
沖子厨勝り乃事



○沖子黒櫛ぐり極の事

沖子 黒櫛ぐりの口に 傳有申し 衣櫛ひあひありてその勝り  
 一やうなぐりて 道具の見合ふ 柱と其首尾の宜しに 衣櫛ひあひあり  
 りて 衣櫛ひあひありて 衣櫛ひあひありて 衣櫛ひあひありて  
 衣櫛ひあひありて 衣櫛ひあひありて 衣櫛ひあひありて 衣櫛ひあひありて

右に床に勝り乃事





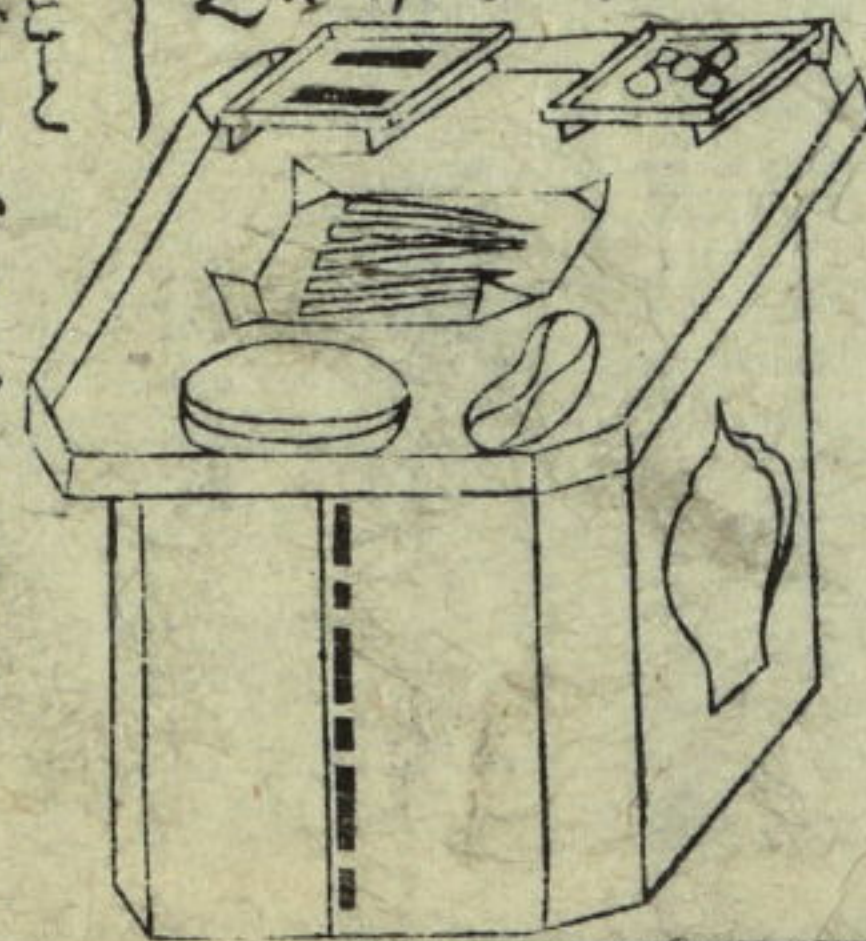
○増れの座敷ゆく忌煙の半

○かふい○らふと○おんへ○まひて○あふ○さふ○りふる○ふ  
○みぢー○ふやーだぞ云詞をばこふうに又。紫○澄○無紋○うのめけし  
なづの衣被をあると云べー又男子はさとの麻衣をいじべー色ハ  
りまむわーあまの事どもう存せんぬかくるー

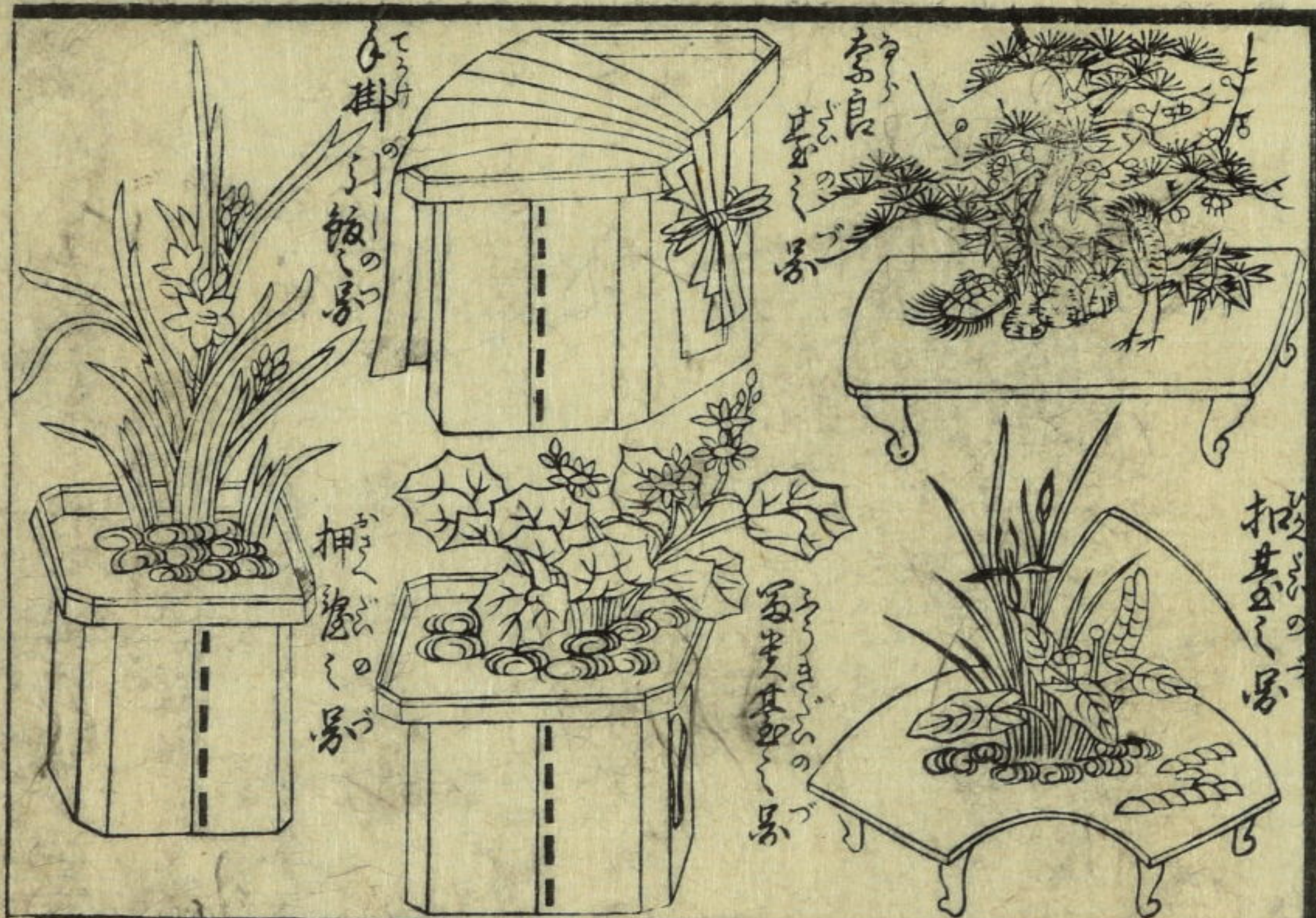


組附渡之場

かつかけにまい  
 右の方にあて  
 うけつけの向す  
 角ふとふぶ二つ  
 たるの向ふは角  
 ふふふふふふ  
 みふふふふふ  
 式と鉄の口と  
 八歳二つあて  
 一先ふふふふ

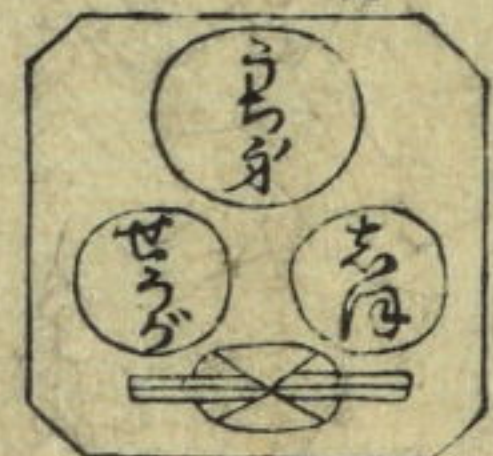


女記下三十九

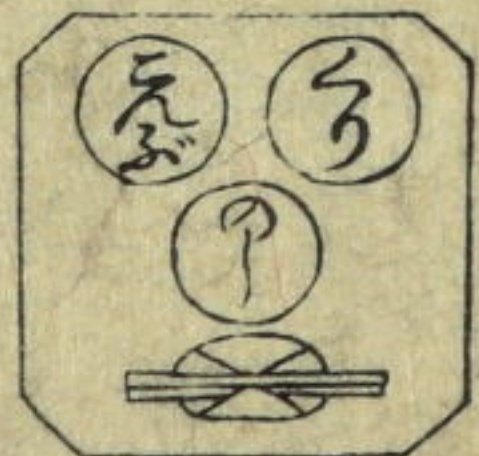


式三軟引波のぐの圖

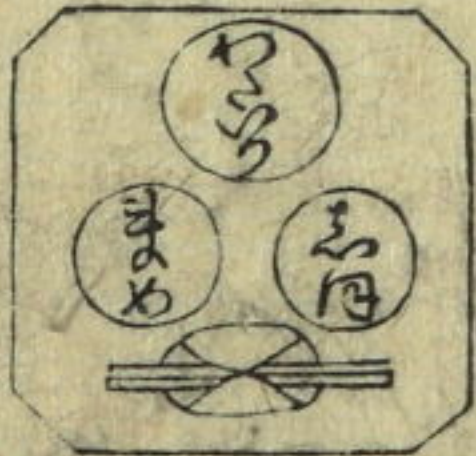
二右



—



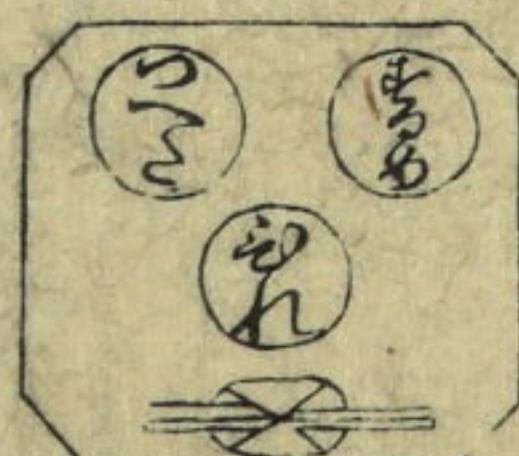
三九



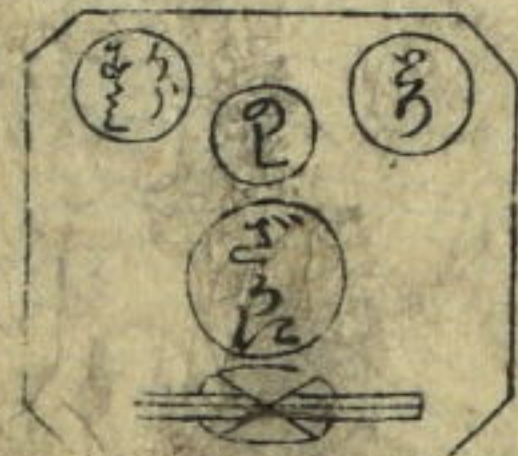
暇にたつた時の家  
の列をよこせこれな  
らぬのたれと云ふと  
りつら

圖ずのの 糞ふ 糞ず

ひれの  
鱈物  
鯛の唐刺のひれと  
その煮物にて



雜者ざうし



う  
わんげふ  
もほせ

う  
いぢえ



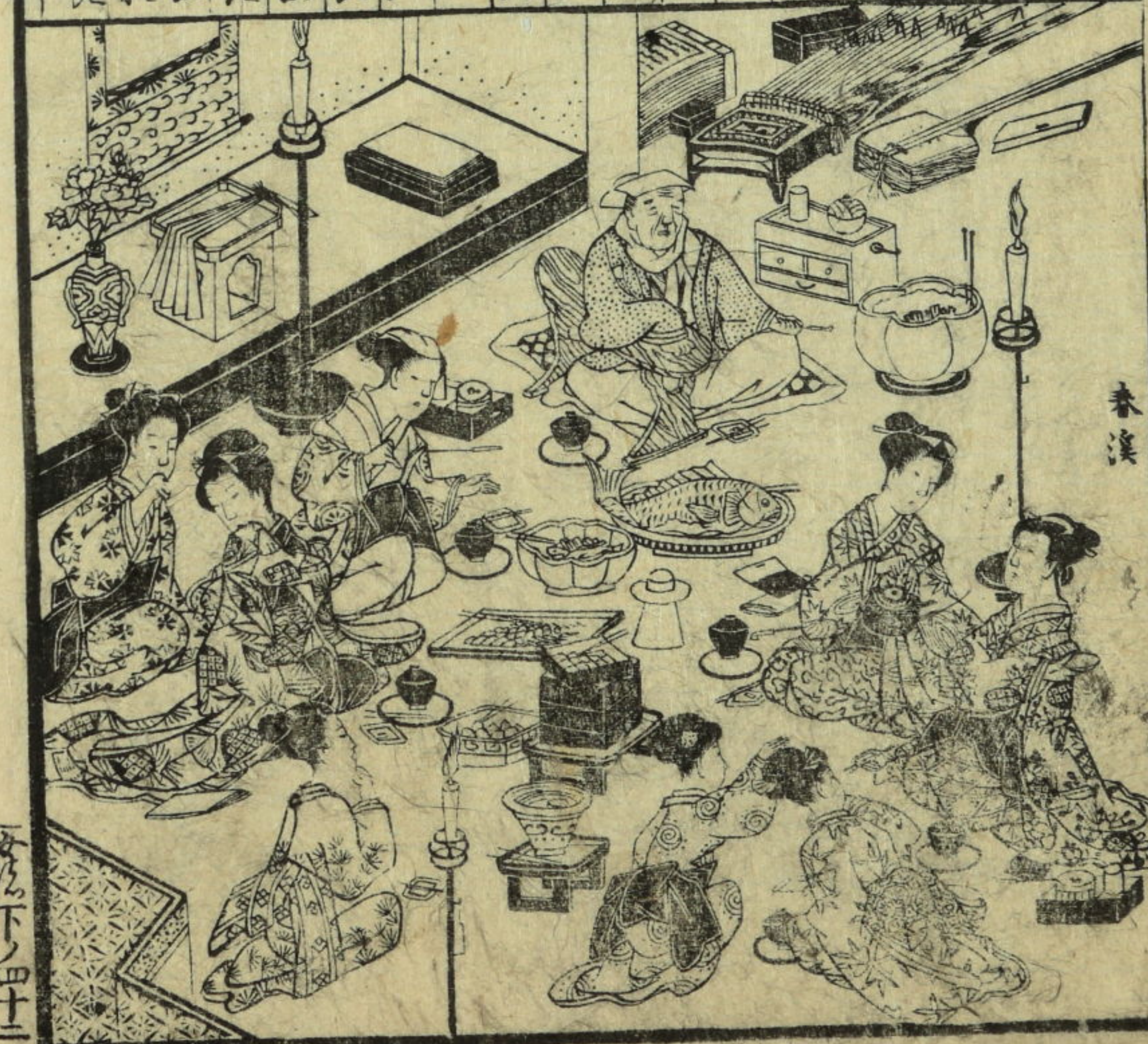








|     |     |     |    |    |    |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 朔日  | 十六日 | 因六ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 朔日  | 十六日 | 因六ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ |
| 二日  | 十七日 | 六ツ  | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二日  | 十七日 | 六ツ  | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ |
| 三日  | 十八日 | 五ツ  | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 三日  | 十八日 | 五ツ  | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ |
| 四日  | 十九日 | 四ツ  | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 四日  | 十九日 | 四ツ  | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ |
| 五日  | 廿日  | 三ツ  | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 五日  | 廿日  | 三ツ  | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ |
| 六日  | 廿一日 | 二ツ  | 三ツ | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ | 六日  | 廿一日 | 二ツ  | 三ツ | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 八ツ |
| 七日  | 廿二日 | 一ツ  | 二ツ | 三ツ | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ | 七日  | 廿二日 | 一ツ  | 二ツ | 三ツ | 四ツ | 五ツ | 六ツ | 七ツ | 八ツ | 九ツ |
| 八日  | 廿三日 | 九ツ  | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 八日  | 廿三日 | 九ツ  | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ |
| 九日  | 廿四日 | 八ツ  | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 九日  | 廿四日 | 八ツ  | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ |
| 十日  | 廿五日 | 七ツ  | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 十日  | 廿五日 | 七ツ  | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ |
| 十一日 | 廿六日 | 六ツ  | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 十一日 | 廿六日 | 六ツ  | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ |
| 十二日 | 廿七日 | 五ツ  | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 十二日 | 廿七日 | 五ツ  | 四ツ | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ |
| 十三日 | 廿八日 | 四ツ  | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 十三日 | 廿八日 | 四ツ  | 三ツ | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ |
| 十四日 | 廿九日 | 三ツ  | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 十四日 | 廿九日 | 三ツ  | 二ツ | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ |
| 十五日 | 晦日  | 二ツ  | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ | 十五日 | 晦日  | 二ツ  | 一ツ | 九ツ | 八ツ | 七ツ | 六ツ | 五ツ | 四ツ | 三ツ |



女流下ノ四十二

浪華 部關牛作并書画



# 女諸通用文章

## 目録

- 一 和まじき文 日五
- 一 人を誘ふ文 日五
- 一 二月節の文 日五
- 一 留まじき文 日五
- 一 八月節の文 日五
- 一 終末人と極文 日五



一 父<sup>ちち</sup>章<sup>あきら</sup>君<sup>きみ</sup>果<sup>は</sup>くくろえの事  
 一 上<sup>うへ</sup>をうやまひ乃<sup>の</sup>女<sup>を</sup>云<sup>い</sup>  
 一 中<sup>ちゆう</sup>分の<sup>ぶん</sup>あくむげうひ  
 一 彼<sup>か</sup>方<sup>はう</sup>は<sup>は</sup>かみそ<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>れそ  
 一 うつううつう方<sup>はう</sup>の<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>乃<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>  
 一 そとつらあくろえの事  
 一 すもつごろろろえの事  
 一 られ<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>文<sup>ぶん</sup>こ<sup>こ</sup>ろろえの事  
 一 用<sup>よう</sup>事<sup>じ</sup>文<sup>ぶん</sup>あ<sup>あ</sup>ろえの事  
 一 ふんふんそそあろ事  
 一 何<sup>なん</sup>時<sup>じ</sup>假<sup>かり</sup>ふん乃<sup>の</sup>事  
 一 そろくろろ文<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>ろろえ  
 一 男<sup>おとこ</sup>子<sup>こ</sup>へき<sup>へ</sup>れ文<sup>ぶん</sup>れあろえ  
 一 人<sup>ひと</sup>へ用<sup>よう</sup>事<sup>じ</sup>ろろ文<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>  
 一 うろろろろろ文<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>  
 一 諸<sup>しよ</sup>根<sup>こん</sup>文<sup>ぶん</sup>ろろろ事<sup>じ</sup>れ  
 一 らろろろろろろの事  
 一 嫁<sup>よめ</sup>れろろろろろの事  
 一 福<sup>ふく</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>ろろろ事  
 一 何<sup>なん</sup>くろろろろろの事

女文

一 病氣石也又くくえの事  
一 死なく中々又あふれず  
一 うゝゝの沢  
一 月の美名をりし事  
一 又あふれ續く事  
一 料紙易めく海之の事  
一 料紙易めく海之の事  
一 口二投かゝ杯の事  
一 お切紙と月の中へ入る事  
一 暫冠あけゆく事  
一 登又付トヤウの事  
一 柳又付トヤウの事  
一 お四つと月の中へ入る事  
一 父の事くあふれぬ事  
一 封めくあふれぬ事  
一 とうけりし事  
一 脇付く下くあふれぬ事  
一 ふたなりす。又吉日  
一 不成能日  
一 親戚就日  
一 十二月の是名

目録終

一 里ぐり懐びた  
一 帯の袂いじふ  
一 安産歎び乃  
一 庖癩えぬの  
一 病人見えぬ  
一 死出悔えん  
一 商人到合せ  
一 牛と人相見  
一 梅枝秋枝乃

日  
日  
日  
日  
日  
日  
日  
日  
日  
日



[illegible][illegible]

二月

へ  
 へ  
 へ

かん  
きん  
くわい  
  
しん  
み  
お  
お  
  
の

わ  
ま  
り  
あ

乃々  
乃々











[illegible]

二月節白文



輪一毫をさうしに  
 へるもさうしに  
 うしに  
 二月  
 日  
 作











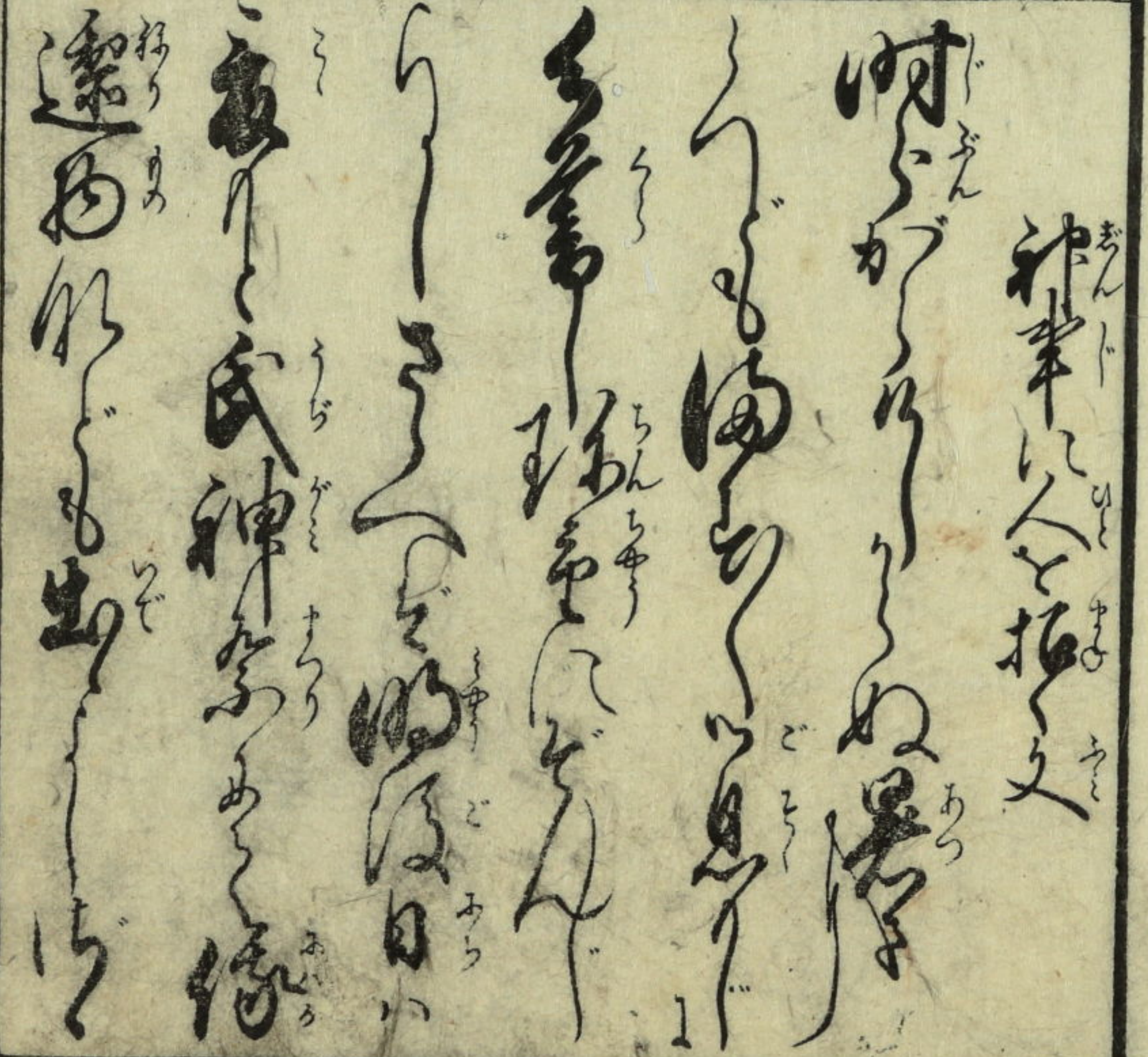
まゝあてぢれんを二つあ  
 して紫と清めおて二つあ  
 めしきと清めおてあうけ  
 のくくより更すまじく  
 清くぬすして徳びく先  
 角屋つとれすまじく  
 ふるり就きももふまじく  
 人のゆゑ又いふもの名を  
 けりしれいふ等と海てあ  
 べさうりけく神佛のそま  
 人の苗まなすれまじく  
 おとておのゝういふま  
 のおまうといふまじく  
 ぬゐのまじく

入月節句の文  
 あやめ  
 高瀬れもさうり  
 せんせん  
 初め  
 初め  
 わ  
 道長  
 道長



まゝあてぢれんを二つあ  
 して紫と清めおて二つあ  
 めしきと清めおてあうけ  
 のくくより更すまじく  
 清くぬすして徳びく先  
 角屋つとれすまじく  
 ふるり就きももふまじく  
 人のゆゑ又いふもの名を  
 けりしれいふ等と海てあ  
 べさうりけく神佛のそま  
 人の苗まなすれまじく  
 おとておのゝういふま  
 のおまうといふまじく  
 ぬゐのまじく



[illegible]

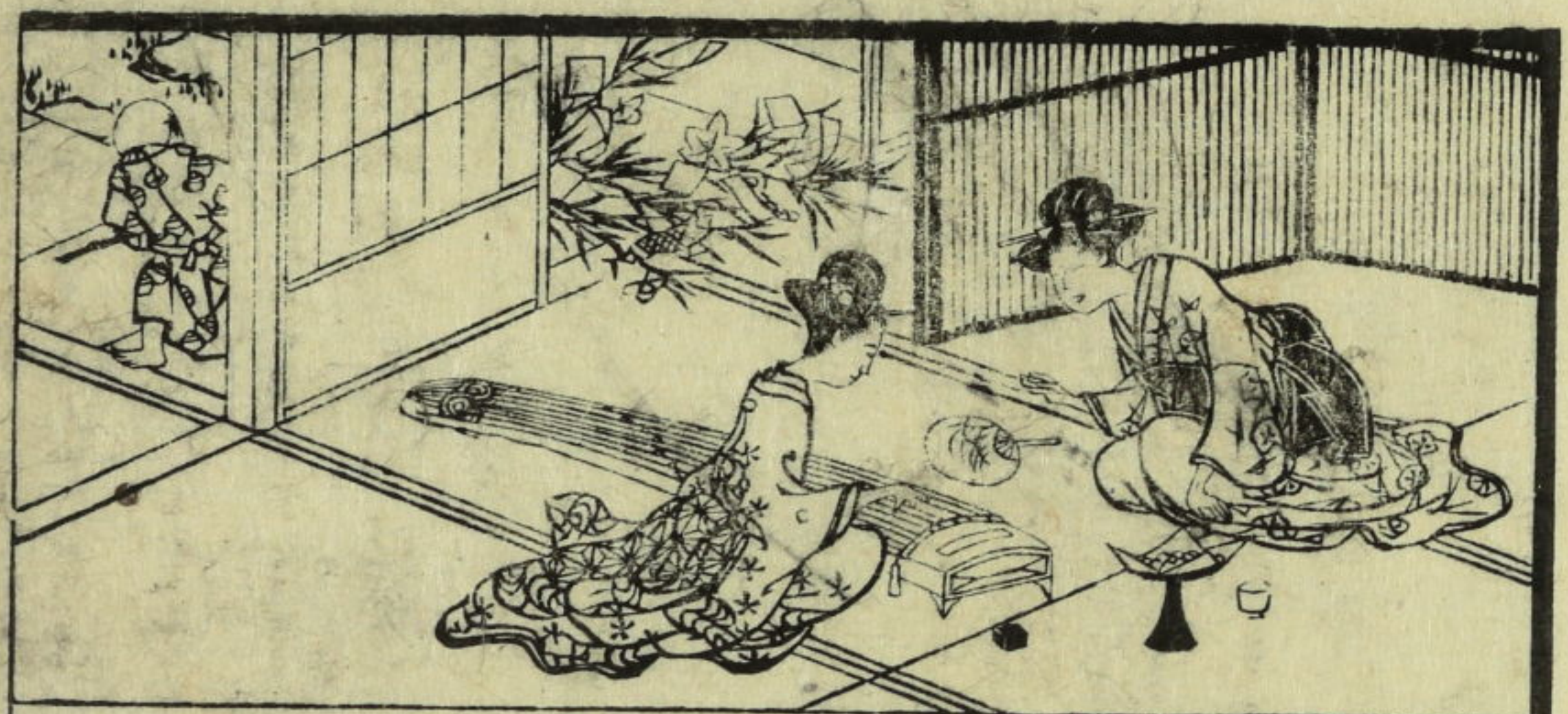






後をいふにむすうに  
 お八自身あつてもお八  
 送るにふりあつても  
 ば酒肴とりて後を  
 送るにふりあつても  
 〇用事つてをうけあふ  
 てもいふにふりあつても  
 常小出物あつても  
 の挨拶をいふにふりあつても  
 安否をいふにふりあつても  
 まづさういふにふりあつても  
 かくさつていふにふりあつても

人々をむすうに  
 〇用事つてをうけあふ  
 てもいふにふりあつても  
 常小出物あつても  
 の挨拶をいふにふりあつても  
 安否をいふにふりあつても  
 まづさういふにふりあつても  
 かくさつていふにふりあつても



〇用事つてをうけあふ  
 てもいふにふりあつても  
 常小出物あつても  
 の挨拶をいふにふりあつても  
 安否をいふにふりあつても  
 まづさういふにふりあつても  
 かくさつていふにふりあつても



出まぐー又用ひあかど  
 らびすては方のひやとて  
 のらふつひひ息あやう  
 ちと甚きれうけ敷  
 子つゝむー  
 〇あまゝをあらす  
 何れかへはひのあま月  
 おにけいひひひひひ  
 といふはひひひひひ  
 てえ方とひひひひひ  
 或いはひひひひひ  
 してひひひひひ  
 ひひひひひひひひひ  
 方れひひひひひひひ

中れ風流うさ  
 うさうさのあ  
 相と魚のうさ  
 りれ東ひひ  
 研の面ひひ  
 しと中ひひひ  
 或ひひひひひ



今宵は旅家の朝  
 月と海あんゝ客一人  
 うさうさのあ  
 折うさうさのあ  
 屏風一双のあ











三月中の月未だ  
 續のつらぬり  
 四月の月未だ  
 五月の月未だ  
 六月の月未だ  
 七月の月未だ  
 八月の月未だ  
 九月の月未だ  
 十月の月未だ  
 十一月の月未だ  
 十二月の月未だ

代々  
 人  
 道  
 留  
 心  
 拂  
 君  
 女



茶の湯  
 時  
 人  
 道  
 留  
 心  
 拂  
 君  
 女



















○ふりてくちくちく  
 後家の文は多く用ゐる  
 してかたより後家の文を  
 あつてくちくちくは  
 れのようび文は用ゐる  
 とあつてくちく  
 ○ふりてくちくちくは  
 用ゐる元禄安永後家梅  
 文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは  
 文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは

結納飲の文  
 文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは  
 文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは



文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは  
 文は後家の文に紙一かき  
 小あつてくちくちくは  
 りてくちくちくは



結納の式おは  
さん  
しき  
い  
かたけ  
あが  
ま

一筆やうりしと殺  
 小娘れ有尾しと整い  
 花もろろ乃歌を  
 ありく目もろろお  
 りしと月夜の  
 ところ近きとて



[illegible]

作ゆいせはく〜夜よを娘むすめに  
おろしおのひ  
ねみりて  
ぬきぬき  
延のび馬うま一束ひとつか送りし玉たま  
我われも〜ぬい納あさなり  
おろしれど  
知んぞとふ

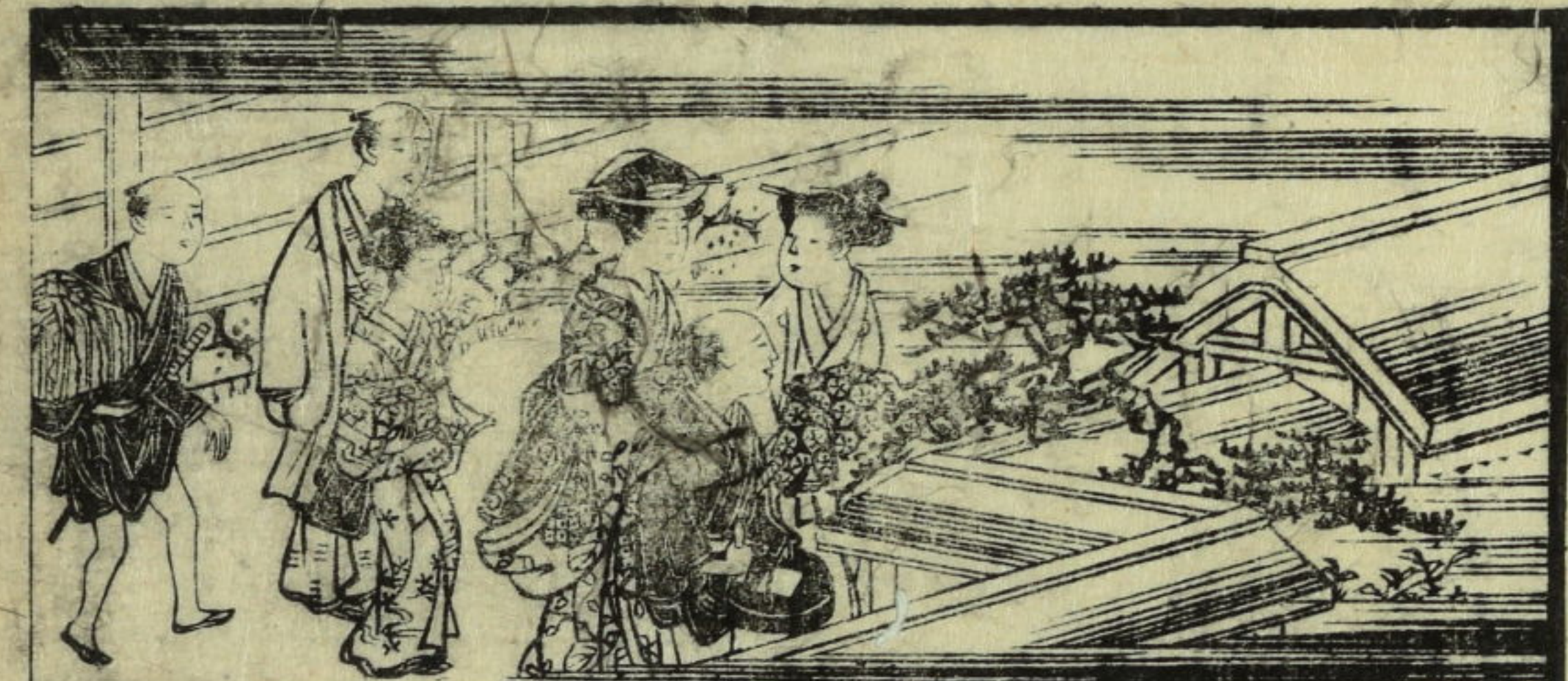






おもひつゝなほとて  
 けしきなりけりあやう  
 しみじみのあやう  
 芳きあやうなり  
 けしきなりけりあやう  
 芳きあやうなり  
 りとておのれを  
 るなり  
 ○きとておのれを  
 ていもなりけりあやう  
 べしとておのれを  
 けしきなりけりあやう  
 芳きあやうなり

満ちておのれを  
 押さへおのれを  
 作しおのれを  
 たりとておのれを  
 納めおのれを  
 けしきなりけりあやう  
 芳きあやうなり



里よりおのれを  
 まつとておのれを  
 けしきなりけりあやう  
 芳きあやうなり



○痛<sup>いた</sup>風<sup>ふう</sup>足<sup>あし</sup>血<sup>けつ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>  
 痛<sup>いた</sup>人<sup>ひと</sup>の名<sup>な</sup>中<sup>ちゆう</sup>腰<sup>よう</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>痛<sup>いた</sup>は<sup>は</sup>  
 ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ハ</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>  
 出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>病<sup>びやう</sup>の名<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>ず<sup>ず</sup>痛<sup>いた</sup>を<sup>を</sup>  
 痛<sup>いた</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>ひ<sup>ひ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>  
 字<sup>じ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>  
 小<sup>こ</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>







うまゑ 早の文ふあてく  
 びと何とぞ開牛按さるふ  
 かしはかこむのうしや暗くらうて  
 惶おその字ありするから男おとこふ  
 羽はちはちは惶おそ謹言きんげんとほおないうらえ  
 かしはもとての文の留とどめめ通とほ  
 して用ゑべー

○月の星名をうらとこ梅兄  
月やあくる平生ふゆに  
言へりしうらとこ梅兄  
花をうらとこ梅兄  
とてあやうきうらとこ梅兄  
うらとこ梅兄とてあやうき  
うらとこ梅兄とてあやうき

[illegible]

安産歎ひの文

[illegible]







○料紙のうしろに極  
 紙を貼るに用いる手紙  
 板紙と云ふは、  
 紙のうしろに貼るに用いる手紙  
 てまてに用いる手紙  
 ように紙を用いる手紙  
 又、紙を用いる手紙  
 料紙と云ふは、  
 と云ふは、  
 のうしろに紙の中より  
 引出して用いる

疵瘡を治す  
 了ゆやうに  
 うるに  
 りて  
 わるや  
 形を  
 しれ



作の  
 日  
 うるに  
 りて  
 わるや  
 形を  
 しれ











衣おしろいつても表おもてはめてお日  
 さまの事ことはううちの方かたの名なを  
 下い今いま時ときは上うへ申まう下したにお  
 てもうてむすび文ぶんを判かんひ  
 接ひかり文ぶんに都うへて吸す着ぎの中なか  
 にんねるいあやもうるうい  
 移うつり中ちゆうハ解かいの江え表おもてに  
 ともう文ぶんの冠かんのあはるが  
 ともひ移うつるうりゆく文ぶんと  
 あてむくた替か冠かんのちぬ



一  
 三  
 五  
 七  
 九  
 十一  
 十三  
 十五  
 十七  
 十九  
 二十一  
 二十三  
 二十五  
 二十七  
 二十九  
 三十一  
 三十三  
 三十五  
 三十七  
 三十九  
 四十一  
 四十三  
 四十五  
 四十七  
 四十九  
 五十一  
 五十三  
 五十五  
 五十七  
 五十九  
 六十一  
 六十三  
 六十五  
 六十七  
 六十九  
 七十一  
 七十三  
 七十五  
 七十七  
 七十九  
 八十一  
 八十三  
 八十五  
 八十七  
 八十九  
 九十一  
 九十三  
 九十五  
 九十七  
 九十九  
 一百

少病人なりけり  
 抱かれり  
 生るるに  
 なるるに  
 なるるに

[illegible]









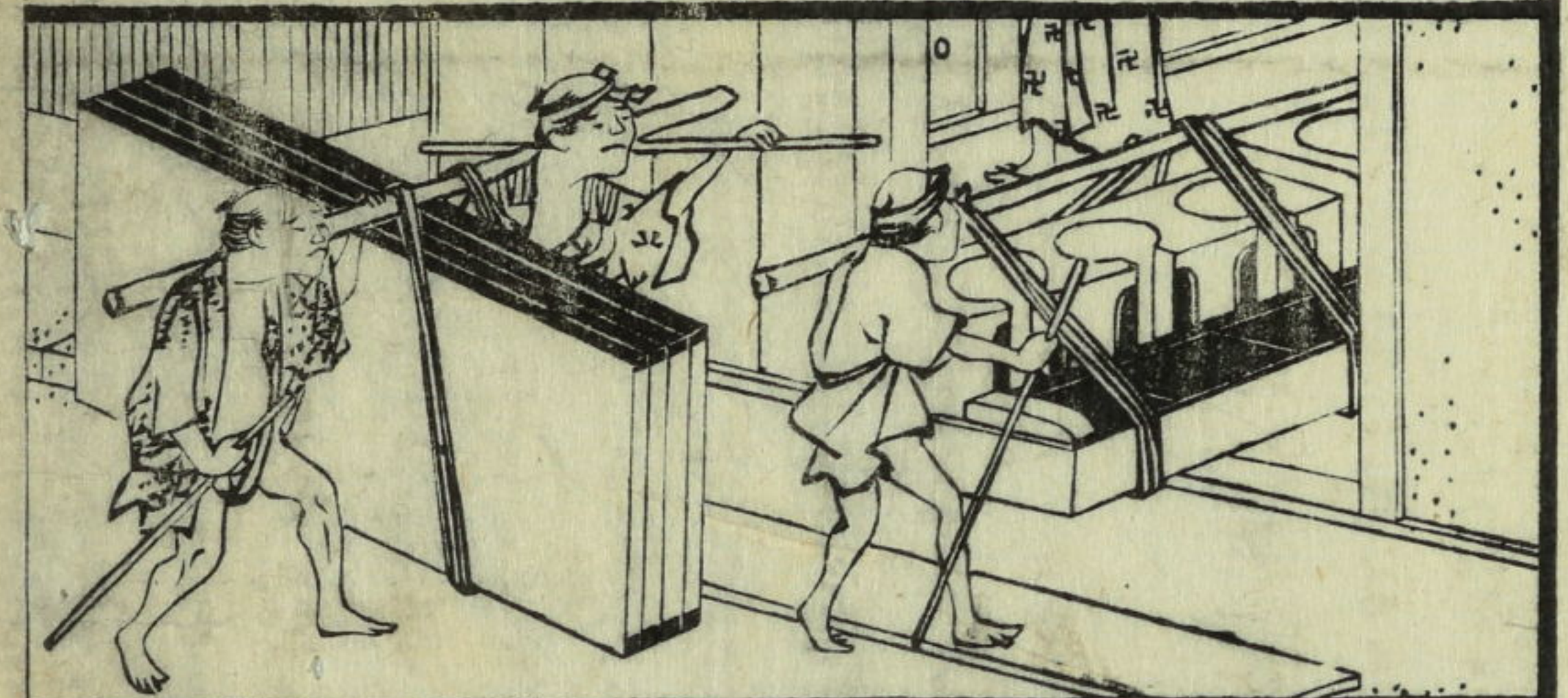






〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて

子らりーわう  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて



一第  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて  
 〇切紙はあつては久  
 天日付はううとて





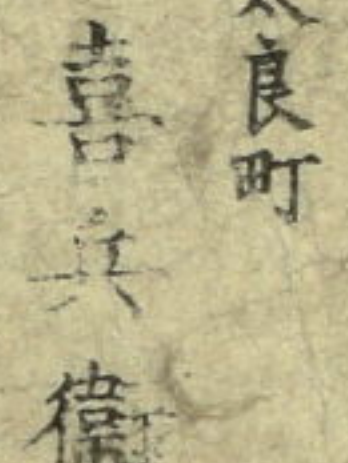
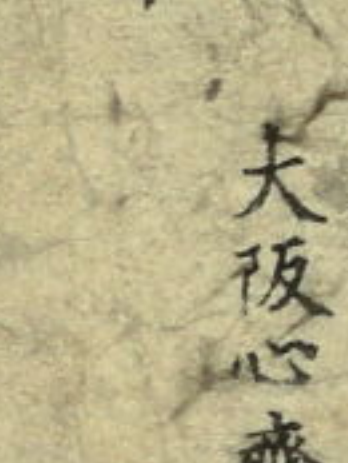
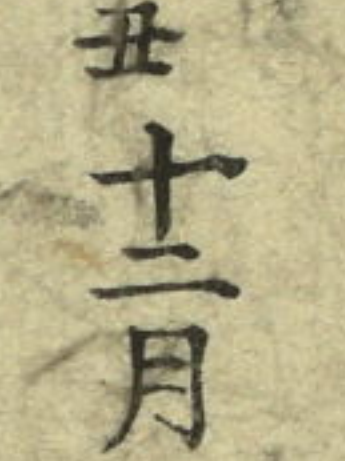
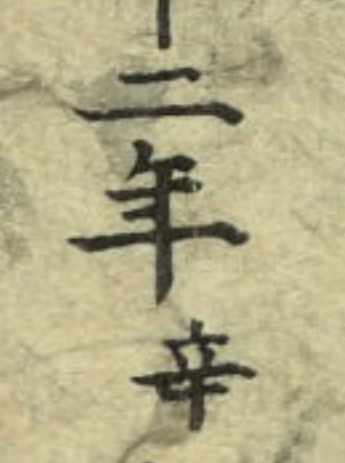
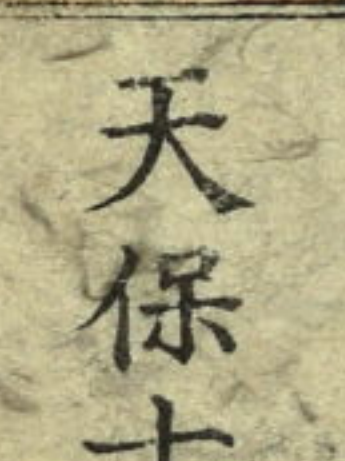
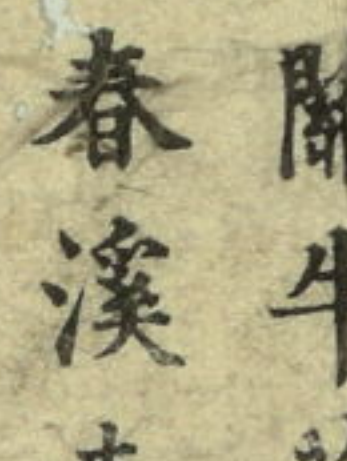
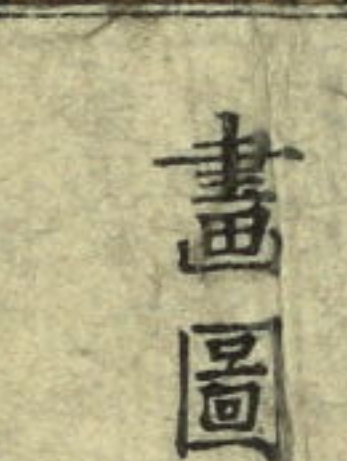
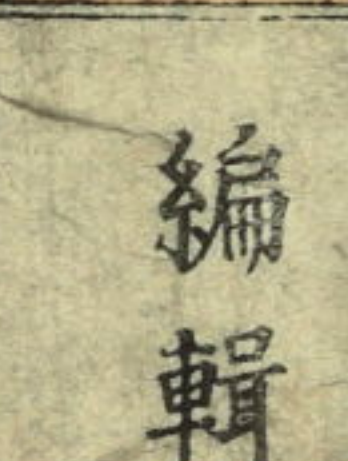


萬載物大吉日

|    |          |    |          |    |       |    |          |    |          |    |          |    |       |    |          |    |          |    |        |    |     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |     |
|----|----------|----|----------|----|-------|----|----------|----|----------|----|----------|----|-------|----|----------|----|----------|----|--------|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 酉月 | 二月十二日十八日 | 戌月 | 三月廿四日廿六日 | 亥月 | 四月廿八日 | 子月 | 五月廿一日廿三日 | 丑月 | 六月廿四日廿六日 | 寅月 | 七月廿七日廿九日 | 卯月 | 八月三十日 | 辰月 | 九月廿三日廿五日 | 巳月 | 十月廿六日廿八日 | 午月 | 十一月廿九日 | 未月 | 十二月 | 正月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 |
|----|----------|----|----------|----|-------|----|----------|----|----------|----|----------|----|-------|----|----------|----|----------|----|--------|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|



女文三十八



編輯

畫圖

天保十二年辛丑十二月發兌

書肆

大坂心齋橋通北太良町

河内屋喜兵衛

春溪森有煌

關牛部德風

木村繁雄撰



天保八年丁酉四月再刻

畫工

法橋關月

彫刻

樋口與兵衛

浪華書林



天保八年丁酉四月再刻

浪華書林

公取掃部少輔町  
八原屋清右衛門



